

門牌 4
號 409
卷 1



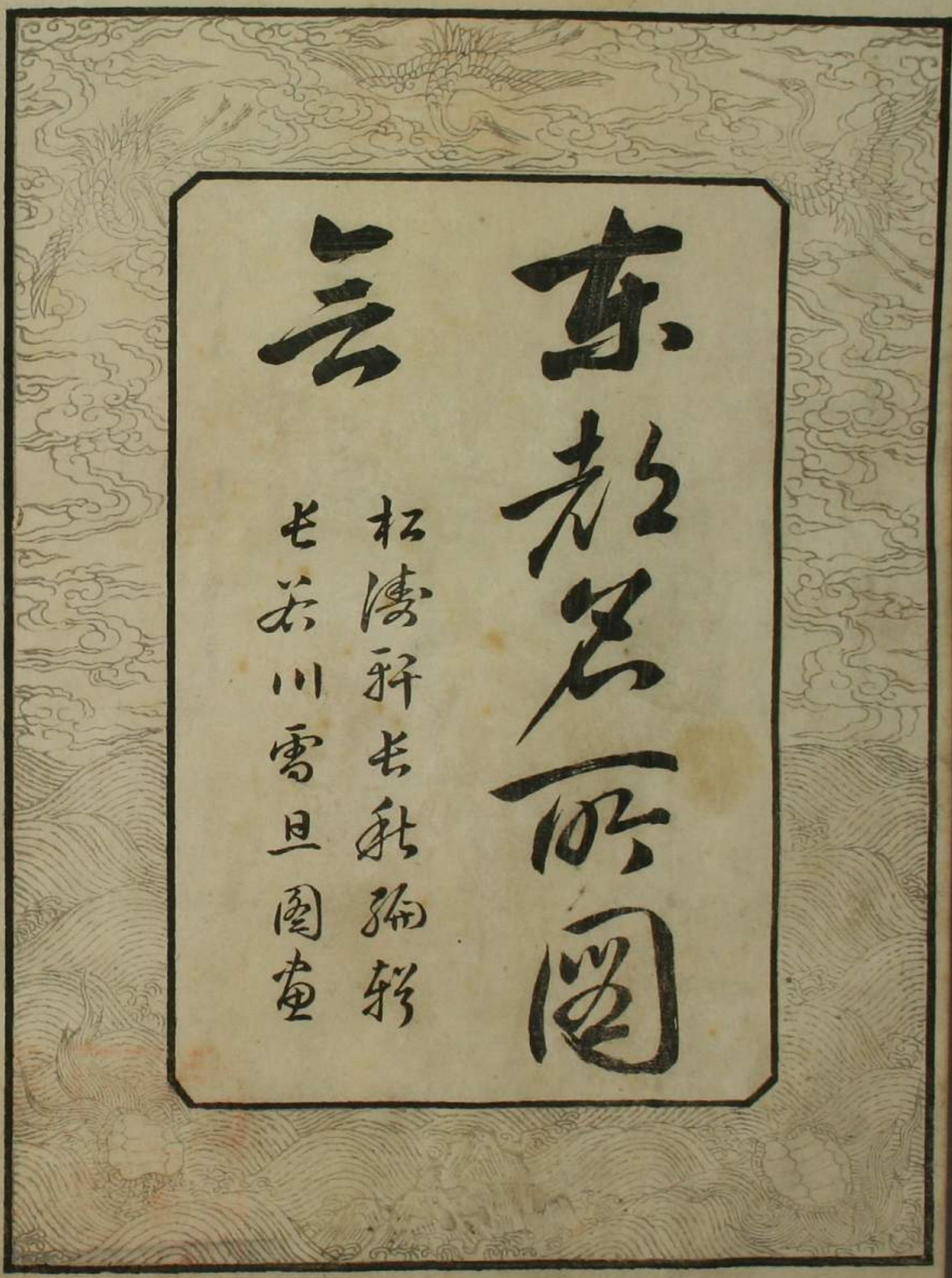
都名所圖會始出遠在余
 時一閱之即謂此可以供
 矣則江戸亦不可無是輯也後
 數歲聞諸西山大久保翁有齋
 藤幸雄者有探勝之癖方撰江
 戶名所圖會採擇稍遍描寫頗



東都名所圖

三

松濤軒長秋編
 長若川雪旦圖畫



盡然獨病江戶稱名所者僅僅
不足俚指也。余謂凡名所之稱
本出於咏歌者流。蓋其設法謹
嚴。畫一。縱今有山秀水麗。足以
吟咏。而其不為古歌所取者。不
得稱之名所。是其所以雖世有

汗隆。要不失為雅馴也。然名者
賓也。實者主也。主豈可以賓加
損焉哉。矧秋里氏之撰。非惟所
謂名所而已。神祠佛寺。說係恠
誕。紫陌綺街。事涉猥瑣者。亦網
羅而不遺乎。矧復江戶之為地。

武野之曠。秩額之峻。湮泯之永。
玉川之澄。絡繹邦域。霞閣思出。
之宜春。真土菴崎之宜。焯衿帶。
郊坳。其勝殆不讓上國乎。是亦
何病之有。翁領而是之。既而幸
雄沒。翁亦尋逝。終不知其成否。

然而秋里氏所著拾遺與味河
泉攝及一二諸州名所圖會者。
陸續上梓。盛行於世。余於是乎。
悵然恨牽雄之輯愆。期失時而
又聞其男幸孝善。追其志。再搜
三索。蒐聚滋廣。猶未公於世。幸

孝亦以文化戊寅沒又遺托之
男幸成牽成泣愛之龜勉不怠
校讐極力竟竣其功間者幸成
突然抵門通刺出其全帙示之
且需序言是蓋由余注日介人
促其成也余乃一閱三歎追念

與西山翁言三紀於茲喜悲交
集又憾幸雄牽孝與西山翁皆
不觀其完成矣然其所以歷年
若此其久者敬慎遺托不敢輕
舉則死者而有知必曰予子若
孫相續能成吾志矣抑畚會之

撰固供卧游。亦以充童觀。非所以專示大方。若夫覽者。尤其不雅馴。則可謂不知類矣。余更為作者分疏其由。云天保三年閏月。冠山松平定常撰。



河三矣書

海內地名。著於古。人和歌者。宗祇澄月之徒。攬而輯之。稱之為山川之險易。風俗之淵遠。名物之同異。可坐而識也。吾江戶名所。顯於古。人和歌。而晦於當今者。不少矣。多麼川。調布。著於延喜式。霞。關。載於武藏風土記。堀。並。井。藁。於紀貫

之僧西行之歌。皆名所之顯於古。而
而今失其蹤者也。及考古之士。過
而訪之。林壑再啓其閔焉。泉石
再炫其奇焉。然無勝情者。則不
能也。瘞藤韋雄有勝情矣。有
勝具矣。江戶勝區名。從棄於榛
叢。三墟之官。而不可識者。披經
谷。披窮林。或訪之。古老。或徵之。
斷碑。又自史傳地誌。諸家名所。
和歌。紀行之書。以及稗說野乘。
苟有足以資考鏡者。必博採
總括。闡發於溟淪。不可問之蹟。
焉。其名所。則著之。繪事。收山河
於尺幅。駭萬象於筆端。亦可

以當卧遊矣。於是百年溷晦之
隙區。英雄百歲之故處。名士列如
之芳躅。榮然。而復炫其奇。有所
謂物不能自見。待人以章者。驗
是。未及成書。遂疾。逝。識者
惜之。嗣子章。孝克繼先緒。補之
未備。余先人與章。孝締交已久
矣。嘗約為之序。而子孝享年不永。
亦繼而捐館。嗟夫。章存。胡為。所。稟
於性者。厚。而所享於子者。獨為。殊。
不獲。痛惋也。及。子。成。能承遺。誠
以一人而任二世之編纂。卷帙為繁。
採掇亦博。而補稍悉。審契。勩必
當。始。克。成。斯。浩。瀚。之。編。可。謂。章。脩。

有人述者無憾矣。乃走不微序於
余。可去。余先人易篋。蓋ハ稔矣。而余
以薄技。浪代先人之任。大方之稍。
固所不免也。天保癸巳春三月
江戸 龜田長梓 謹識

牧野信之 

毛筆の書法... 九牛の

Handwritten text in Arabic script, consisting of approximately 15 lines of dense, cursive script.

Handwritten text in Arabic script, consisting of approximately 15 lines of dense, cursive script.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript, spanning two pages. The text is written in a dark ink on aged, yellowish paper. The script is dense and continuous across both pages, with some variations in line spacing and character forms. The right page contains a few characters that appear to be in a different script or dialect, possibly Chinese or Japanese, interspersed with the main cursive text. The overall appearance is that of a well-preserved but aged historical record.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged, yellowish paper. It consists of approximately 15 lines of text, starting from the top left and moving downwards. The script is dense and characteristic of early modern European handwriting.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged, yellowish paper. It consists of approximately 15 lines of text, starting from the top left and moving downwards. The script is dense and characteristic of early modern European handwriting.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged, slightly yellowed paper. It consists of approximately 15 lines of text, starting with a large initial letter 'S' and ending with a period. The script is dense and characteristic of early modern European handwriting.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. The text is written in a dark ink on aged, slightly yellowed paper. It consists of approximately 15 lines of text, starting with a large initial letter 'S' and ending with a period. The script is dense and characteristic of early modern European handwriting.

神はるゝに、
お(海軍)の
ら、
海軍の
伊勢丸の

はるゝに、
お(海軍)の
ら、
海軍の
伊勢丸の

Handwritten text in a cursive script, likely a form of shorthand or a specific dialect. The text is arranged in approximately 10 horizontal lines. The characters are highly stylized and interconnected. A prominent character resembling the Chinese character '極' (Jí) is visible in the lower-left portion of the page.

Handwritten text in a cursive script, similar to the left page. The text is arranged in approximately 10 horizontal lines. The characters are highly stylized and interconnected. A prominent character resembling the Chinese character '大' (Dà) is visible in the upper-left portion of the page.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a single column on the right page of the open book. The script is dense and flowing, characteristic of early modern cursive handwriting. The ink is dark, and the paper shows signs of age and wear.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a single column on the left page of the open book. The script is dense and flowing, characteristic of early modern cursive handwriting. The ink is dark, and the paper shows signs of age and wear.

るみらるゝのあはれに
 義れせむとて
 何の家とよはしむるは
 のうははらふとて
 申さるはゆつとて
 心も

松海新長秋とて

凡例

凡此編の次序ハ 大城と以て首と 餘ハ東方小回環す
 近北斗七星の位に配當して都て七巻と以て全終せし
 凡江戸の地ハ廣大盛壯して名流高士の芳躅ハ蔚然と
 して使冊と照曜し琳宮梵刹ハ林の如く森なりて悉く括へ
 卷す小邊なり故にその中にも由致河を撰て録せ或は傳記
 亡ひて澄と云ふれば其土人の口碑も存するものと取て澄
 せり或ハ其根の浮説中を言妖妄小説と云ふものハ其と者く
 然りと雖人は小賸をて傳記の之れに於て今強ち小添削
 評隲を加ふる小録と云ふは姑く其後と載せ大伽藍と雖も
 東歷事實と亡失をて詳ふざる事録の是且小祠支院の類
 新建築のりは悉く其れと附載せんと欲するもの
 此日後輯の成る小及ひて附載せんと欲するもの

凡方位と示すハ希位ニ循うて某の東南南ハ在りと標
又左右と示すハその地ニむらむとする傳の左右と云覽るの
おまを推て標準とせよ

凡引用の書全文と載せしめてその綱要のそと撮る至意と
摘るりのハ紙頁増多しと覽るれば厭倦の心を生せん紙
恐るらざるに於てハ神佛刹小傳の所傳の佛像宝塔書畫
諸什蓋の類神奇附會小傳りて去質決すへううさるハ社司
寺僧の言ひ傳る所不任せし記も又或は風土記の殘編ハ
偽言ありと難古來より世に傳へる書多し其姑く是と
用由その取捨をむりてハ覽る人の意を立るのそ
凡神社佛閣の幅員方域と圖するハ其の當今ハ形勢と
換寫は且地畧の間小田時遊觀の形勢と繪くハ其態度
風俗後傳容儀ハ以亦當今の形容と其を舊地ハ基て画する

りのハ各時と分り是地ハの風光と洞壘と地邦の人として
東都盛大の繁榮あると知る志あり且童蒙ハ觀覽ハ倦む
かろつとありんう為りあり

凡此地名所の中衣冠野隅田川二布とて第一の晴翠と以故
隅田川ハ支峯小分ちて六七の二卷小記せり西岸ハ芙蓉ハ白峰
雲間ハ峰ハ東岸ハ流波の翠鬟晚霞小巖して山水の風致備り
縦觀の美ハ地小傳まらう依て支峯の全勢と眸中ハ收んと欲せ
ハ支卷と對照して其全局と知るへ
凡真間の舊跡ハ下総の地ハて衣冠少ありすと以て人とも纏るふ
利根川と隔つるのそハて實ハ萬葉集以降ハ芳蹟あり且
文人墨客吟筵と負ひて遊邸と曳くり其ハ必其風光と賞く
第一の壯觀と以て於て豫念志の例ハ倣ひと係せ祀
ハ此其内ハ收む覽るれば其志と諒せよ

附言

此書ハ祖父寛政中此編ありて父縣麻呂刪補文化の末あり
文政の今あるて上梓の功と終るぬ凡年序と終るる年有餘年
に都蕃昌小隨て神社寺院境地沿革するの頗多し一向の小祠も
須臾小壯漸する大社なるを徳の伸菴も巍然とる莊嚴せられる
もの少くは或は祝融の災小罹りて樓門回廊と焼失し礎石の
存するの類無廢枚挙すんがは然りとてても時と改りて其
在る今時の跡又差つるの多し見るりのいふるをせん

齋藤月岑藏

江戸名所圖會卷之一

天樞之部目錄

武藏國號基

日本衣尊秩父岩倉ふきと收りノ圖

江戸始元

河城興基

元且諸侯登城基

吹上河庭

八代曾河岸

姥の江

涉籠橋

常盤橋

天王河旅所

十軒店

浮世小橋

今川橋

福田村舊址

荒副

本浪町土手

神田明神舊地

護持院舊地

坂田町

田安基

築土明神舊地

大江戸東南の市街より川海と望の景
松平小橋
道三橋
日本橋 同魚市
梅林坂 同天満宮
一石橋
通町 大徳寺町末本橋
本石町時の鐘
堀留 同陸河原
千代田村舊跡
神田橋 同魚市
小川町基立 同水
御茶の水

水道橋 神田区

昌平橋 神田区

藍深川 神田区

柳橋 神田区

歌舞妓芝居 神田区

新大橋 神田区

鬼塚 神田区

天満 神田区

伴難太神宮 神田区

新川太神宮 神田区

五比須前橋神社 神田区

了然禅尼菴宝地 神田区

江風山月樓 神田区

采女系 采女井 神田区

新橋 神田区

三縁山増上寺 神田区

極樂橋 神田区

四聖堂 神田区

日比谷稻荷洞 神田区

真福寺 神田区

金地院 神田区

西窪八幡宮 神田区

赤羽川 神田区

赤羽神社 神田区

駿河臺 神田区

神田川 神田区

辯慶橋 神田区

清水如水宅地 神田区

吉東町旧地 神田区

江戸橋 神田区

天王御旅所 神田区

俳仙其角翁宅地 神田区

三ッ橋 神田区

新川酒問屋圖 神田区

永代橋 神田区

狭炮洲 神田区

任玄明神社 神田区

寒橋 神田区

尾張町呉抜店 神田区

織田有樂齋第宅地 神田区

飯倉神明宮 神田区

菽小治 神田区

城山 神田区

慈野権現宮 神田区

日光院 神田区

毘沙門堂 神田区

筋違橋 神田区

丹後殿前 神田区

柳東封疆 神田区

沙草橋 神田区

杉森稻荷社 神田区

加茂六洲稻荷社 神田区

日田市 神田区

澁の渡 神田区

茅場町藥師堂 神田区

祖東先生居宅地 神田区

隨見屋浦 神田区

藥師堂橋本稻荷社 神田区

半井下養翁居宅地 神田区

西本願寺 神田区

織田有樂齋第宅地 神田区

尾張町呉抜店 神田区

飯倉神明宮 神田区

菽小治 神田区

城山 神田区

慈野権現宮 神田区

日光院 神田区

毘沙門堂 神田区

芝浦 神田区

西應寺 神田区

三田 春日明神社
 功運寺
 飛塚
 伊四子薬師堂
 高輪り系
 稲荷洞
 三山稻荷社
 綱坂
 月波楼
 濟海寺
 祖来先生墓
 牛小屋
 泉岳寺
 常光寺
 東禅寺
 谷山
 産湯水
 三田八幡宮
 竹葉寺舊址同古事
 魚藍觀音堂
 高輪大木戸
 如來寺
 寶藏寺
 太子堂庚申堂
 聖坂
 潮見坂
 七田坂
 網塚
 小山林明宮

武藏

東海道小屬七和名類聚抄曰平佐之國府多磨郡不在と云々
 武藏國上古八東山道の内に入る光仁天皇の宝龜二年辛未冬十月己卯
 大政官奏しく東海道小屬せしむるあり續日本紀不見え
 橋樹 荏原 豊島 足立 新座 入間 高麗 比企 横見 埼玉 大里 男衾
 藩羅 榛澤 那珂 兒玉 賀美 秩父 葛飭 等以上二十二郡あり
 那珂等の三郡と加へ葛飾と除て共四郡とすれ詳るるは貞享三年丙寅三月利根川の
 西を割く武藏國小屬せしむ昔は小所葛飾の半を割く利根川の以西を武藏の國は
 一圓小下総國ありと右云々今ハ葛飾郡の半を割く武藏國管二十一とあり葛飾郡
 葛飾郡と凡以東を下総の國の葛飾郡と凡和名抄葛飾を如止志かと訓も同書多磨も多波と訓あり
 今是を加へく二十二郡と和名抄葛飾を如止志かと訓も同書多磨も多波と訓あり
 古事記牟邪志小作 舊吏記胸刺小作 萬葉集小年 同くむさしと稱せ
 其義ハ風土記抄小ハ武藏の國秩父の嵩ハその勢ハ勇者の怒り立ち
 也日本武尊此山小東夷征伐の祈願をこめあひその後東夷盡く平治
 せしその武器を秩父岩倉山小納めありこの國とむさしと稱せしと
 なり其後 称徳天皇の神護景雲二年武藏の國より白雉を獻し
 卿の奏せし言小哉武崇文の祥ありとありて此國を武藏の字を以嘉名とせし
 續日本紀称徳紀云神護景雲二年六月癸巳云武藏國橋樹郡人飛鳥部吉志五百國於



ヤマトの日本武尊東夷征伐
 の時武具以杖父
 岩倉山小收り
 是武藏國号の
 濫觴なり

倭健戎容猛
 征西又伐東
 腰間十束劔
 草薙偃威風
 春齋子

同國久良郡獲白雉獻焉即下郡縣之奏云雉者斯良臣一心忠貞之應
白色乃聖朝重光臨之符國号武藏既呈武藏文祥一とあるハ
牟邪志の三字を好字に改め二字に定め武藏と書て志の文字を畧うれ
しより此白雉の瑞兆を武藏の二字を祝して奏する詞より今の名なきとあり
東照宮様當國は大成を志め鴻業の基を闢さるひより
四海竟に干戈の勞を忘れ万民長に太平の化を浴する乃是
天意のあらうむる所やて國の號も自ら昇平の所代不應とあり
家集 物名むさし

枝折せむさしとて是より一門の遠くわたりて似たり

江戸 豊嶋郡峽田領とて其封境往古ハ廣くわたりて似たり

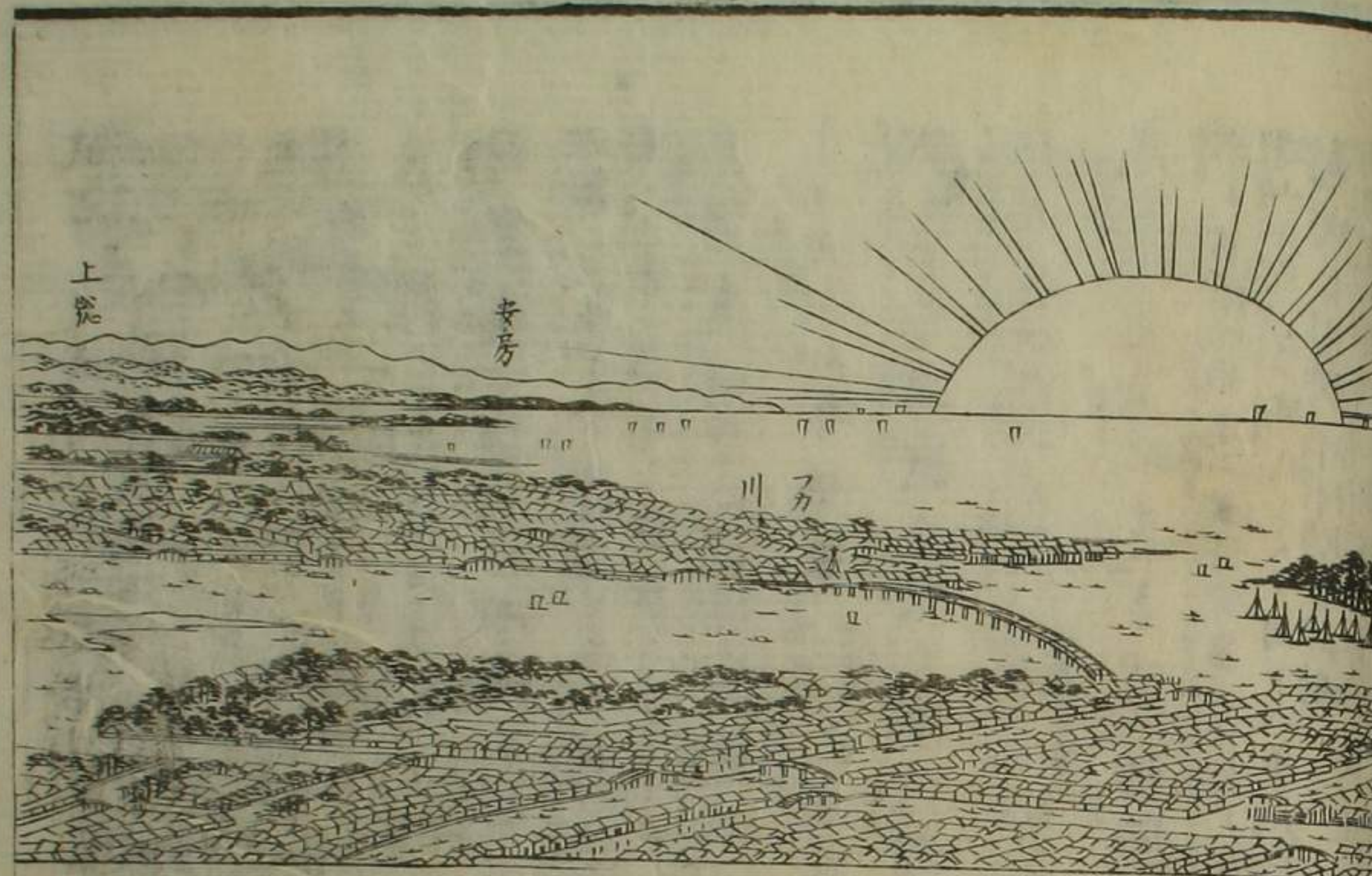
白石先生の説ハ江戸ハ庄の名あり云云按中古庄と唱へハ郷の字をのり
郷里共は佐登と訓を令義解云九五十戸為里と云々然る時ハ佐ハ秋登ハ処の畧ハ
して廣大なるの意ハ武藏國風土記ハ在土小作傳云此地ハ大江に臨
故小江戸と稱せりとのハ 甲陽軍鑑ハ江戸の辺を中武藏と唱ふとあり義
ある時ハ江戸の地ハ平頂あり重長領せり南向亭ハ平川一水と
隔て今の三の丸の地ハ江戸の郷日輪寺の方ハ神田郷ありと云々今ハ
飯田町の下ありつゝ入堀の水脈懸りたり又同一説ハ今の所城の
地ハ江戸と云ふ地あり

御城の野は嶽れより彼地の惣領とある江戸の名ハ此類なる云云寛永二十年開
校のあつたまゆりとのハ冊子に彼へのりて白雲の葉未みむを浅草を打越のけ
ほしとありむの江戸はつとありとあり上の意ハ天正己降江戸を以て
御居城の地となし故小日を重ね月を追ひ益繁昌小坂あり

今ハ徑緯拾里よせむと都々江戸と稱せり萬國列産の藩
邸市麩商賈の家屋鱗差して縦横四衢に充滿一万户
千門甍を連ねり実ハ海陸の都會やて扶桑第一の名境といひ

江戸大城基立 人皇百三代後花園帝御宇鎌倉の官領上杉修理
大夫定政の老臣太田左衛門太夫源持資入道道灌
持資の傳弟五
太田左衛門太夫源持資入道道灌
持資の傳弟五

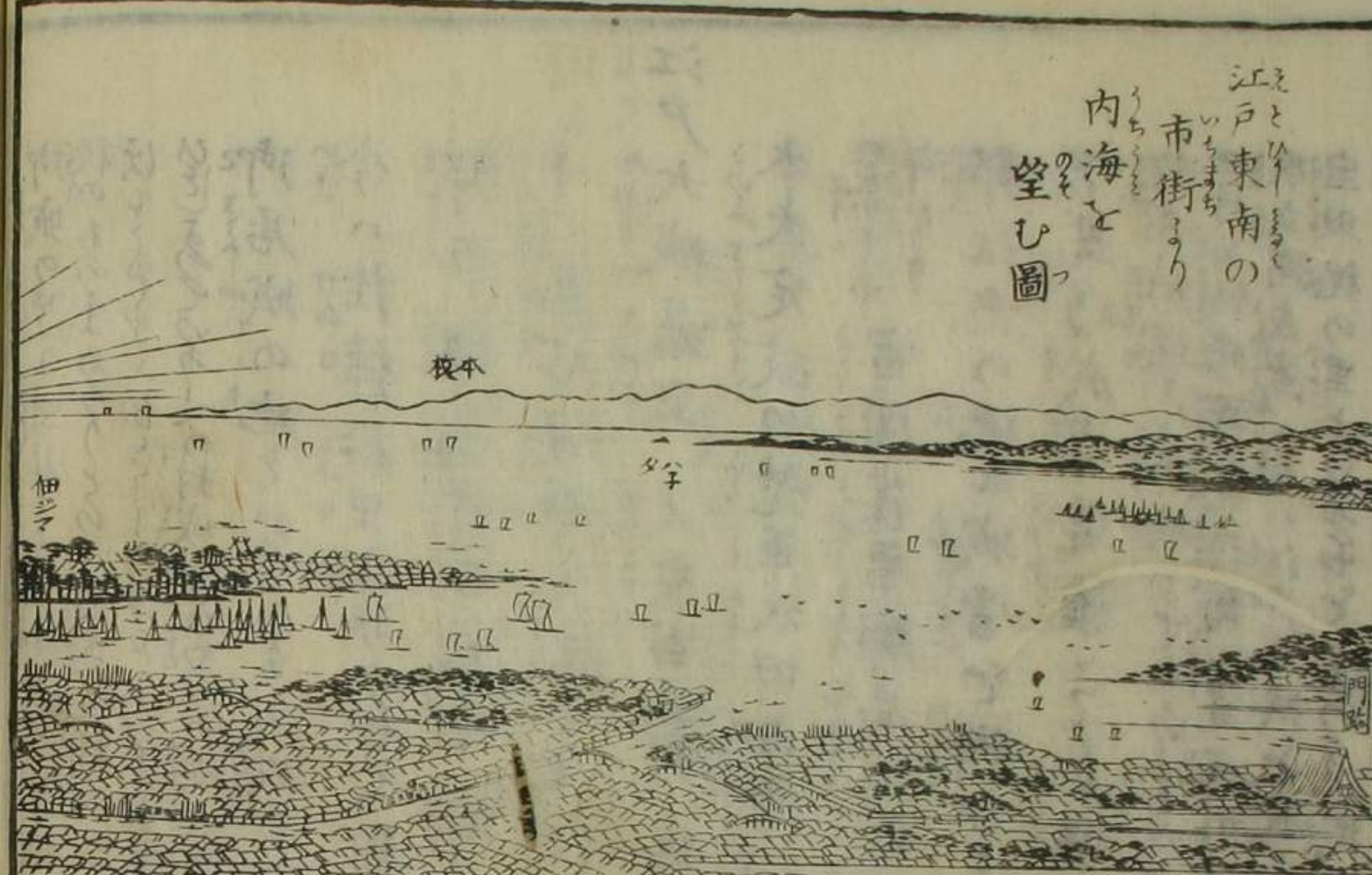
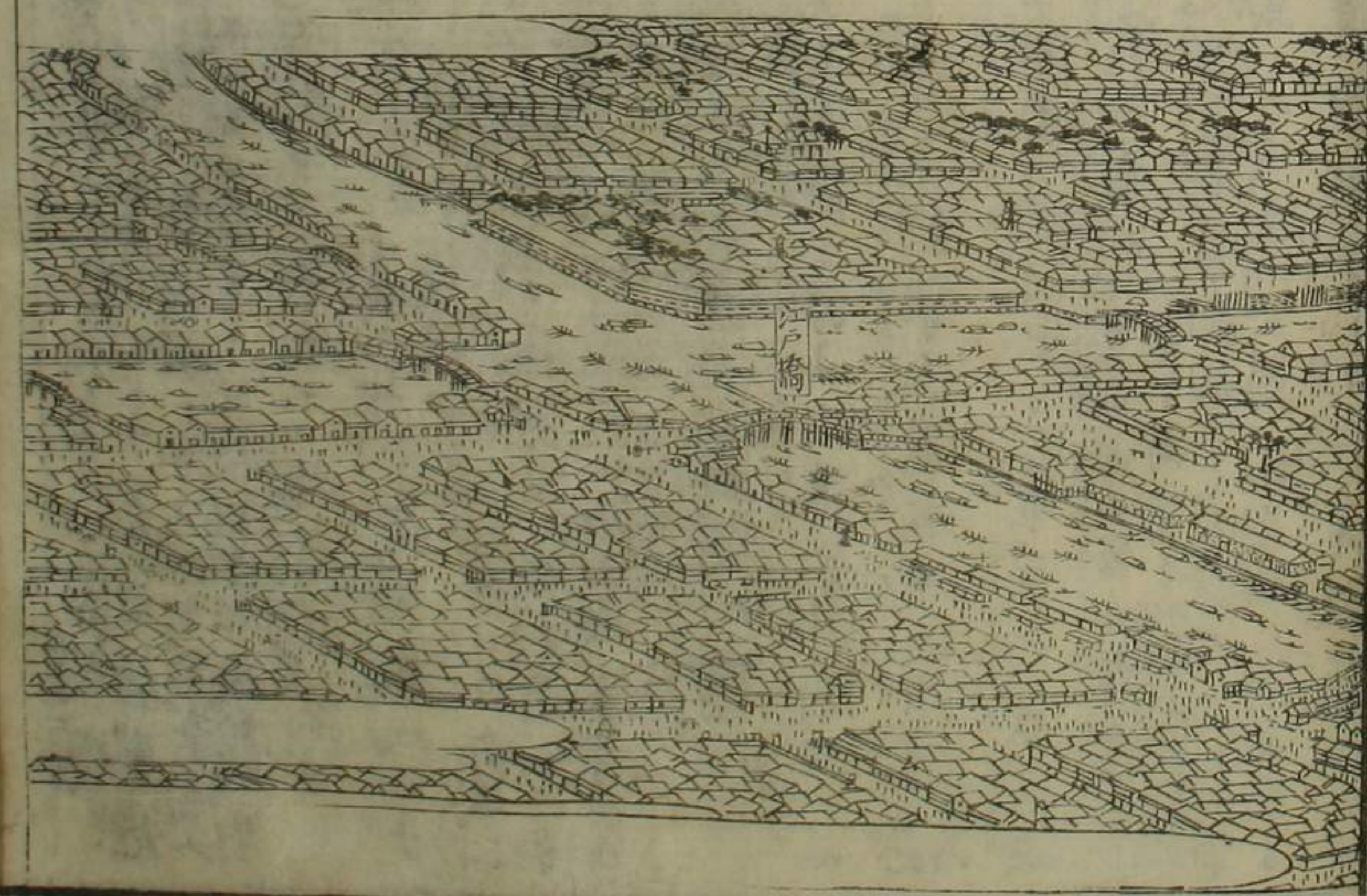
郡江戸の地は城營を闢むと一康正二年丙子經始一長祿元年
丁丑巧成く道灌くは移り住む 道灌の傳弟五
持資相繼く居城とすとの事ハ詳ならず太田備中入道若竹の城を
四月上杉修理大夫持朝入道武州河越の城を取立らる太田備中入道若竹の城を
取立同左太夫ハ江戸の城を取立らる太田備中入道若竹の城を
宝田祝の里よりありと云々又一説ハ千代田春田堂田等の三



上
空

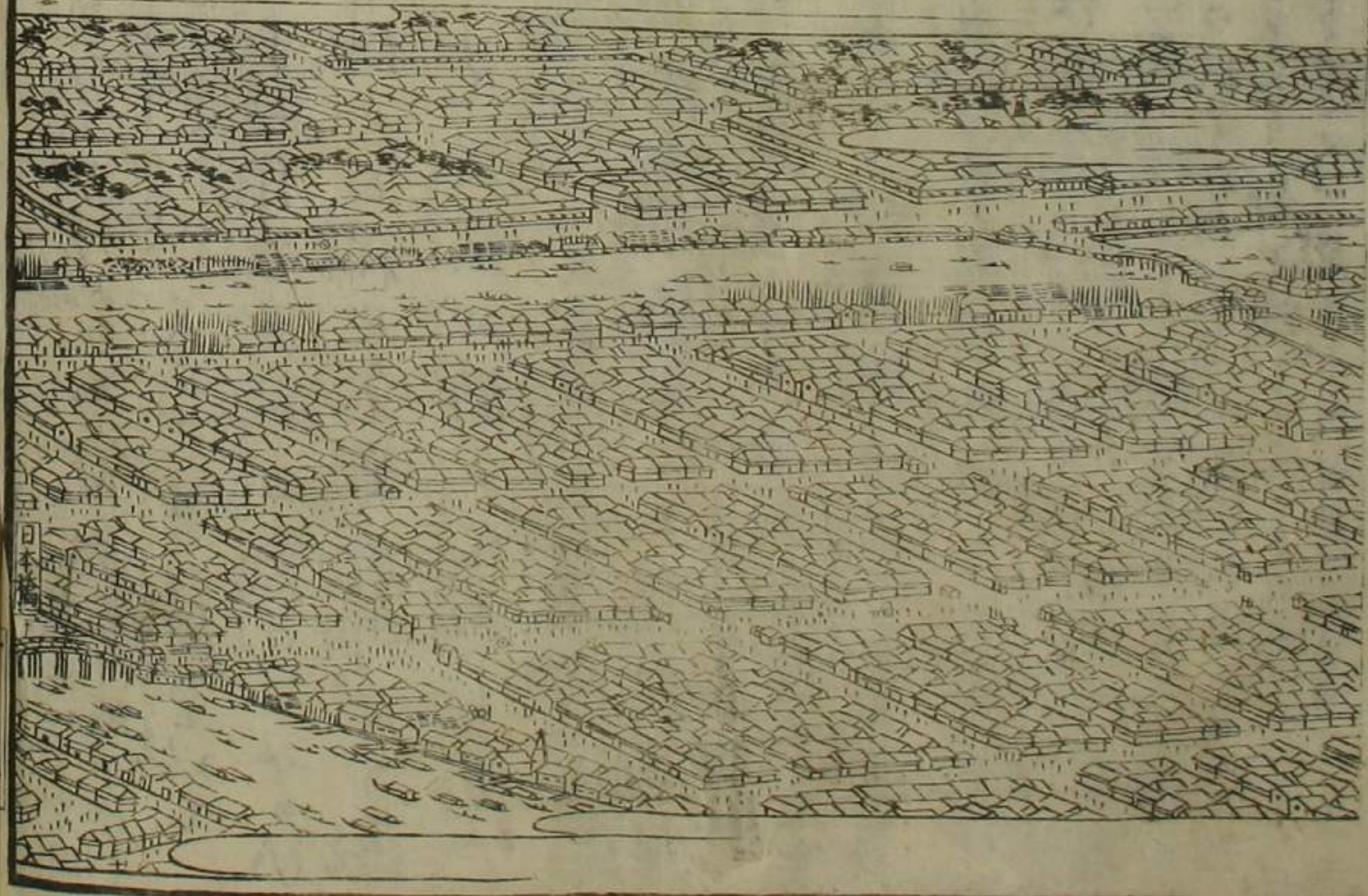
安
房

川
分



江
戸
東
南
の
市
街
と
内
海
と
望
む
圖

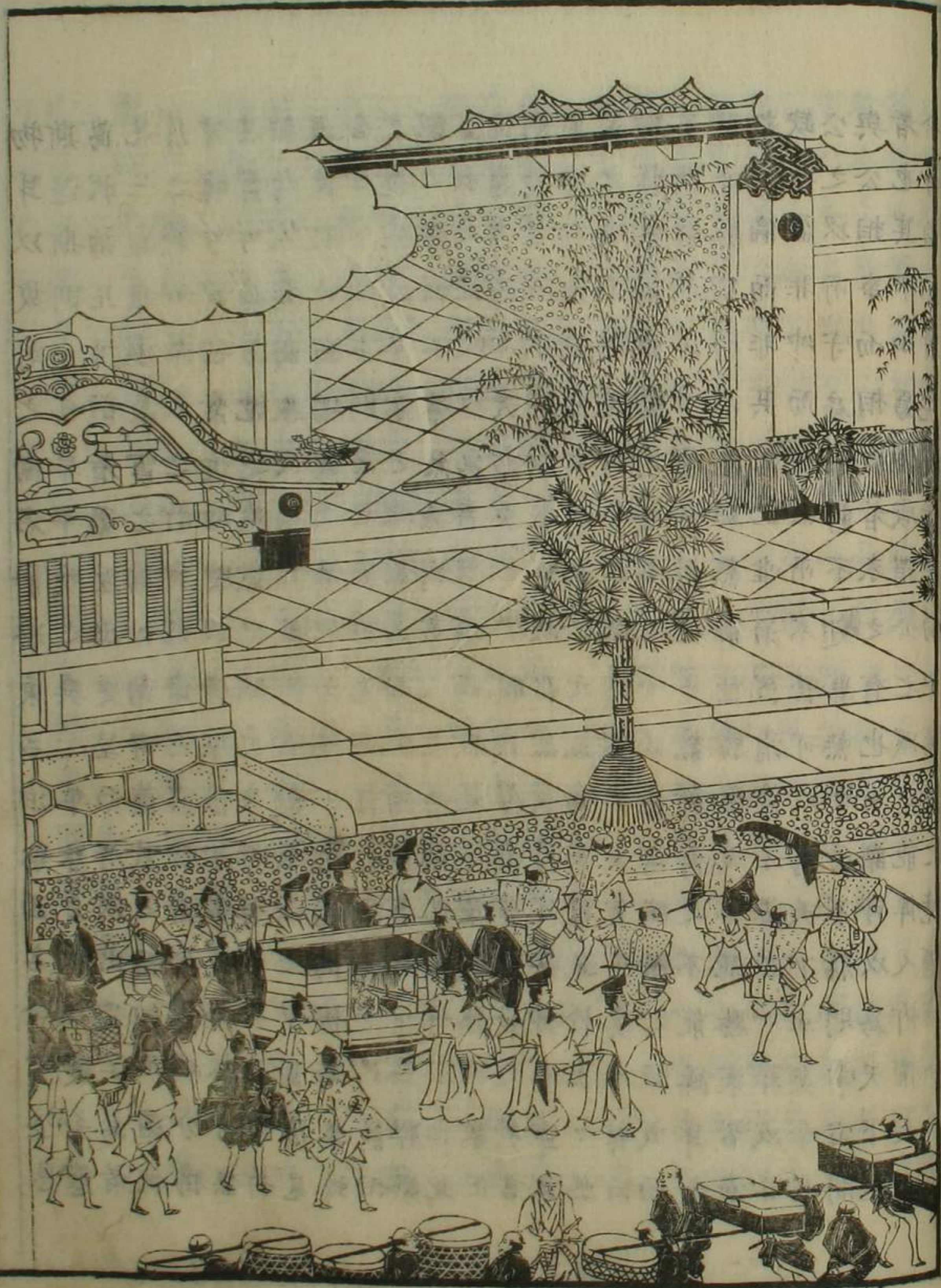
校
平



武州江戶河越岩付等小城墨を築く
或ハ人名トシテ大道寺支山翁云天正
城中ノ燕所ノ室を以テ軒の南を靜勝
東吳萬里船ヲ入ル古人の詩を引ク然
大ニ稱揚セリ此地ノ美景ハ江亭記
後ハ定政の子ニ屬シ依執行ナリ
同豊後守を以テ此城を守リ
次郎自胤等と置置とあり按テ項長尾景春
戰引ニシテ多ク鐵倉あり江戶の城ニ
其後定政の子同五郎朝良同修理大夫朝
一〇大永四年甲申正月十三日北条左京大夫
敗走シ河越の城ニ移リ是より後ハ氏綱
政直遠山四郎左衛門小田原記某等を城代
氏直ニ至リ迄々々四代の間北条家ニ屬
然レ永祿の始遠山丹波守富永三郎左衛
遠山左衛門守當城を守リ天正十八年
同勢遠山丹波守當城を守リ天正十八年
其家没落セ

より己来永く
御當家の御居城と定させられ同年八月朔日江戶の大城へ
台駕を移させし其頃迄は僅そかりの城營とす小慶長年
間御城廓の地を廣げさせし唯今の如く巍々然と萬世
不易の大城とハなりし

江亭記寄題江戶城靜勝源公所肇築也
武州東戸城者太田左金吾道源公也
關流籍甚比來騷亂以來固兼之命者八
風三州之謂二安危係于武一欽州之危
一州城可會他州郡唯以一人夫城之爲
舟車之固以碧垣者異郡之里許外有巨
峭立以鄰碧架巨材爲之紆樓障庫之備
門石其牆磴徑左翼其側而雪嶺天如三
中閣若于直舍則逾原而瀛天如三萬
爲玉屏若于直舍則逾原而瀛天如三萬
白瑠璃野與海接與天連者舒廣行平蕪
碧瑠璃野與海接與天連者舒廣行平蕪



藩邦玉帛此朝宗
 關險何須百二重
 四海道通舍勃澥
 中原嶽秀有芙蓉
 城地日暖晴雲迥
 邸第春分淑景從
 回望鬱蔥佳氣裡
 車如流水馬如龍
 服元喬

元日諸侯
 登城之圖



舍者與公缺於躁不躁窮氣則矣室餌之合出而其背月凡萬斯物
雪也公之非一能缺勝之神清慮收之旗日沒南叢曠之三狀遊耳
泊其相以盈偏勝盈寒域與者其天衆施々於入可兮皎焉拍斯以
船不爭所非而寒而靜則氣成躁此無騎成竹海蕪岡如東儿則故
者知而守冲非而不勝雖合歌而詞失以彙泉則烟旅地紫天晨翫日
浣焉相扁而其不冲熱鬼而詞失以彙泉則烟旅地紫天晨翫日
花者戰於後正能譬清神太和常為聚之房雲大之近之霞者早南
老威者軒無也勝如淨弗清者矣吾區犀米際之獻腴與絢互晚靜
人謂未不所唯熱躁為克為成杜有別犀米際之獻腴與絢互晚靜
蜀公之翅不泊靜之天測與政戶賤我人杏之至茶橋漁之環而野呈一名泊
中之有勝勝然能正機氣為後厚是所鹽信之繫來畔水波風所春舩
倦威也熱可清勝靜蕪矣馬乃養乎賴也漆銅繩去有常曙兮颯出秋名舍
遊愛所無以淨熱靜蕪矣馬乃養乎賴也漆銅繩去有常曙兮颯出秋名舍
之能謂所為不而靜灣矣道其已其於桌危之擢夜其某島如焉之舍
境俾可不天浴於能不解之真於神發搖呼危之擢夜其某島如焉之舍
題人以勝下於正一勝能之真於神發搖呼危之擢夜其某島如焉之舍
扁忻為則正一勝能之真於神發搖呼危之擢夜其某島如焉之舍
兩懼天宇今成皆耳成有々寧於散出膠箭集隱曲可分嶺焉千公
及矣下宙也非滯夫而曰無其言正此藥相政見折樵鴉秋者態

以松此地同此景至老鴻名在公乃吟中一風流爾聽
者六十年矣丙申於此矣是公欲需及且題詩其上者蓋
亦有三子題于後遊適介人請一室幸于左要屬之能言告之
二日我未嘗東遊于適介人請一室幸于左要屬之能言告之
予也也我未嘗東遊于適介人請一室幸于左要屬之能言告之
序可也我未嘗東遊于適介人請一室幸于左要屬之能言告之
吳昇也我未嘗東遊于適介人請一室幸于左要屬之能言告之
秋八月也我未嘗東遊于適介人請一室幸于左要屬之能言告之
傳聞靜勝軒中蓬萊四面窻扉一々村菴靈彥
芥天晴碧海無期泊舩處關心西嶺成蕪過漁火如從遠
樹來我老無期泊舩處關心西嶺成蕪過漁火如從遠
兵吹雪聲中築受降聞君延客日臨腮風帆多少載詩
去吹雪聲中築受降聞君延客日臨腮風帆多少載詩
籍々威名關以東又知天下有英雄鼓雲龍不起邊城
靜驅使江山入鼓中知天下有英雄鼓雲龍不起邊城
江戶城高不可攀我公豪氣甲東關三州富士天邊
雪收作青油幕下攀我公豪氣甲東關三州富士天邊
雲連雪嶺水連吳城上軒憲閑畫圖最愛似留行地
日雲連雪嶺水連吳城上軒憲閑畫圖最愛似留行地

古壯遊士有志於四方者必以富貴過關左山泉
之隅田河登焉凡士遊有山則左者遊之百不美予藏
年時項間而太望筑波然今則皆遠初志者遊之百不美予藏
是為江甲兵戶四城而有田功於國焉蓋武之關也英一守
武州於甲兵戶四城而有田功於國焉蓋武之關也英一守
險萬於甲兵戶四城而有田功於國焉蓋武之關也英一守
景天不進亦在十萬有田功於國焉蓋武之關也英一守
此有舍置一稀武州其扁曰勝隙也備其壘以邦也一江勝當
四泊則西齋曰有富軒山其扁曰勝隙也備其壘以邦也一江勝當
一山則西齋曰有富軒山其扁曰勝隙也備其壘以邦也一江勝當
託其登此城軒也乃北四觀此武野也東而南一有城田河勝又有
軒東間之西到也乃北四觀此武野也東而南一有城田河勝又有
屬中不遊之西到也乃北四觀此武野也東而南一有城田河勝又有
求正具陳躬詩上其地得京師志之當士城野而南一有城田河勝又有
求正具陳躬詩上其地得京師志之當士城野而南一有城田河勝又有
未且後宗東遊之西到也乃北四觀此武野也東而南一有城田河勝又有
在希世靈彥年龍集丙申八月初吉書而子岩柶之志尚

寄題左金吾源大夫江亭
士嶺衝前晚照殘中勝景畫中看一山暮得
鵬載泊前晚照殘中勝景畫中看一山暮得
客萬頃玻璆可釣齋帆南揖日斜西髻端雪白漁竿
華館相攸主亦賢江亭茲試武城下客東俱榮
地西嶺當窻界夫珠履三門後陽篇樓十戶二波黏
中仙憑誰說與蕪夫子赤壁休誇河陽後陽篇樓十戶二波黏
士嶺衝前晚照殘中勝景畫中看一山暮得
庶經籍滿床羅俊英新架有春畫靜閣東篇樓十戶二波黏
光晴丹青難畫圖外惟幄暈籌張氏情籬茅舍育暮
左金吾源大夫江亭茲試武城下客東俱榮
關左金吾源大夫江亭茲試武城下客東俱榮
而兼要勝之雄武冠乎者大相府也連山可木奇傑
為兼要勝之雄武冠乎者大相府也連山可木奇傑
佳木蔚然日並海以武冠乎者大相府也連山可木奇傑
也木蔚然日並海以武冠乎者大相府也連山可木奇傑
山也木蔚然日並海以武冠乎者大相府也連山可木奇傑
以翼然乎其家中東武之一都而會揚一益二之亞稱
以翼然乎其家中東武之一都而會揚一益二之亞稱

也鬱也東望則平川縵花長堤綫迴水石瑰偉兮
 芬掩映乎數十里瀛海會吳楚南神人所居
 則滄洲其前則百谷萬所不與可近野蒼圻乾
 一此當關最東而無國安以也周室中微地之
 恧方金甫城于敵仲之喉甫襟內行武府之置
 公柵之功外謂與益兵家之玉立萬餘文西
 曰勝靜可勝與兵家之玉立萬餘文西
 羣南之雪積水芙蓉以漱翠翳以朝陰晴自
 人蓋北也雲飛鷗鷺汀漁家而龍赤雀以朝
 桂棠舸經旅小如織而泊也龍赤雀以朝
 寔樂矣哉締解如織而泊也龍赤雀以朝
 襟宇瀟灑以詩鳴其雅也龍赤雀以朝
 是湘水即美以詩鳴其雅也龍赤雀以朝
 羨其亦寓之即美以詩鳴其雅也龍赤雀以朝
 成章亦寓之即美以詩鳴其雅也龍赤雀以朝
 也何求之寓之即美以詩鳴其雅也龍赤雀以朝
 柳也且其邪景象之曼乙而云馬文明丙申秋之
 聊也且其邪景象之曼乙而云馬文明丙申秋之

文
 呼
 其
 人
 道
 權
 奇
 合
 文
 明
 六
 年
 六
 月
 十
 七
 日
 江
 戶
 城
 中
 道
 權
 奇
 合
 道
 權
 奇
 合

心敬 資俊 資忠 資常 資信 資常 資信 資常 資信
 好 快 音 道 珠 孝
 繼 兼 譽 權 阿 範
 長 治 上 七 人 判 者 心 敬 僧 都 瑞 泉 坊 孝 範

孝範家集 二月十三日 聖廟法樂 靜勝軒 太田道權

うそくそく色ももるぬ梅の家... 孝範

宗長東土產 於... 孝範

霜さゆき松花... 上杉 建芳

今朝... 道權

一日... 道權

此和歌... 道權

此和歌... 道權

宗牧東國紀行

一日天氣よくく江戸の城にほくらと遠山甲斐守千人を
つゝあれハ種なき先旅宿の事云付られたりとて小亭主
宗三とて和泉塚危あれハ時宜ふやま一城より使明後日
上徳國へ出陣の事侍るともむりハ一産懸望けりり色々
故障めいさくの由再往なむとも不及了簡あられハせむさく
登川くくり始られより杯とて一順の為とて茶も取あへせ

五 五 花小あけけせく、子里う那

此城の遠望下ハ運籌帷幄中決勝千里外これあはれ
つゝく祝しとてあり又六日太田越前守無終の事
中末きりこまハ小田原あての義約とチなりとせむに
明日息弥を齋出陣あまハ取乱さそつてハ世はとこ
絆約同心あまき執心あまハ数言のともよけふ世あす
花小くぬ 終落あくむ 色もこり ね

入江かけとて 釜に ちりつふあくも みるも ひろ野
あひあひ心ろ 浴やせけかり 暮さてくれハ富士もんを
あけさけさけ中あかりとて武蔵野の眺望あま
ぼくくくくくく 東の矢くく又花吹波山の亭とて遠浦
帰帆むさく 燈をともすくも みるも けりさく のぼり
夕月夜盃あつりくく

因もあひつる白雪のそとふらけし山をゆくのか

鳴る出陣又を守へ詠進一わらわつと一各異見の事
てさうかたを忌むり七日あをさうりき此軍勢一わや

始十四日とある天文十四年三月なり

吹上御庭 旧名を局澤と云 按吹上は江戸に臨みて高き地とあり

松原小路 田安御門の内なり 昔此地松原あり 往古太田道灌我庵を

御館を建られた木立の御館と呼 松系つぎ後述

梅林坂 平川口御門の内あり 文明十年の夏太田持資或日一室

あり午睡の中靈夢を感じ翌日菅公親筆の画像を得 菅公親筆の

勸請一梅樹數百株を栽依く梅林坂の号ありと云 菅公親筆の

八代曾河岸 和田倉御門の外に砂堀端を以て 天正以前此地

波打際ゆる漁者の住家のみなり 其後日比谷町と云

看店多き町屋となり 小慶長の頃ヤウスハチクワンと云

異國人は此地を 名所咄ハハ重敷ハ作又江戸産ハハ連州と

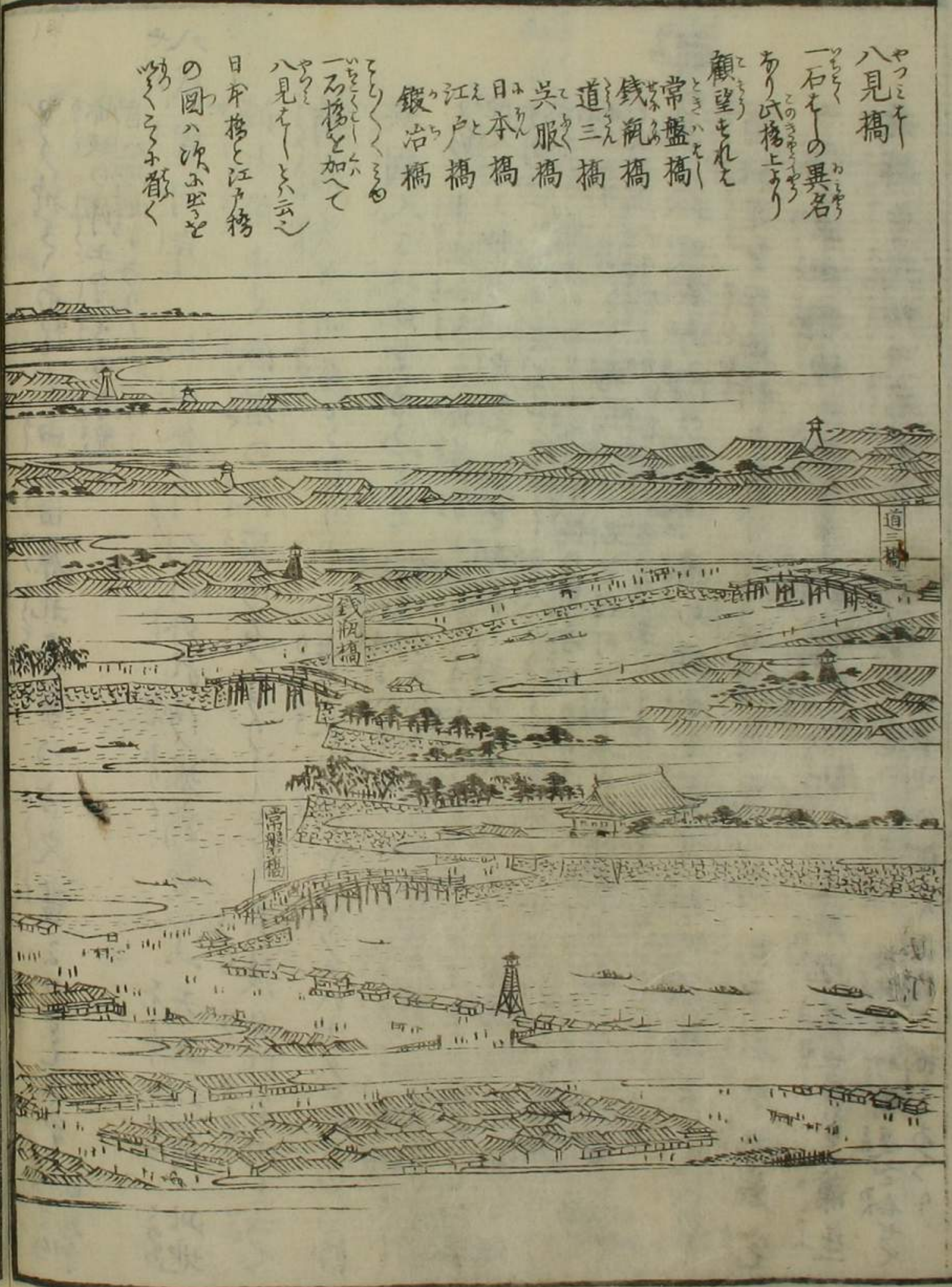
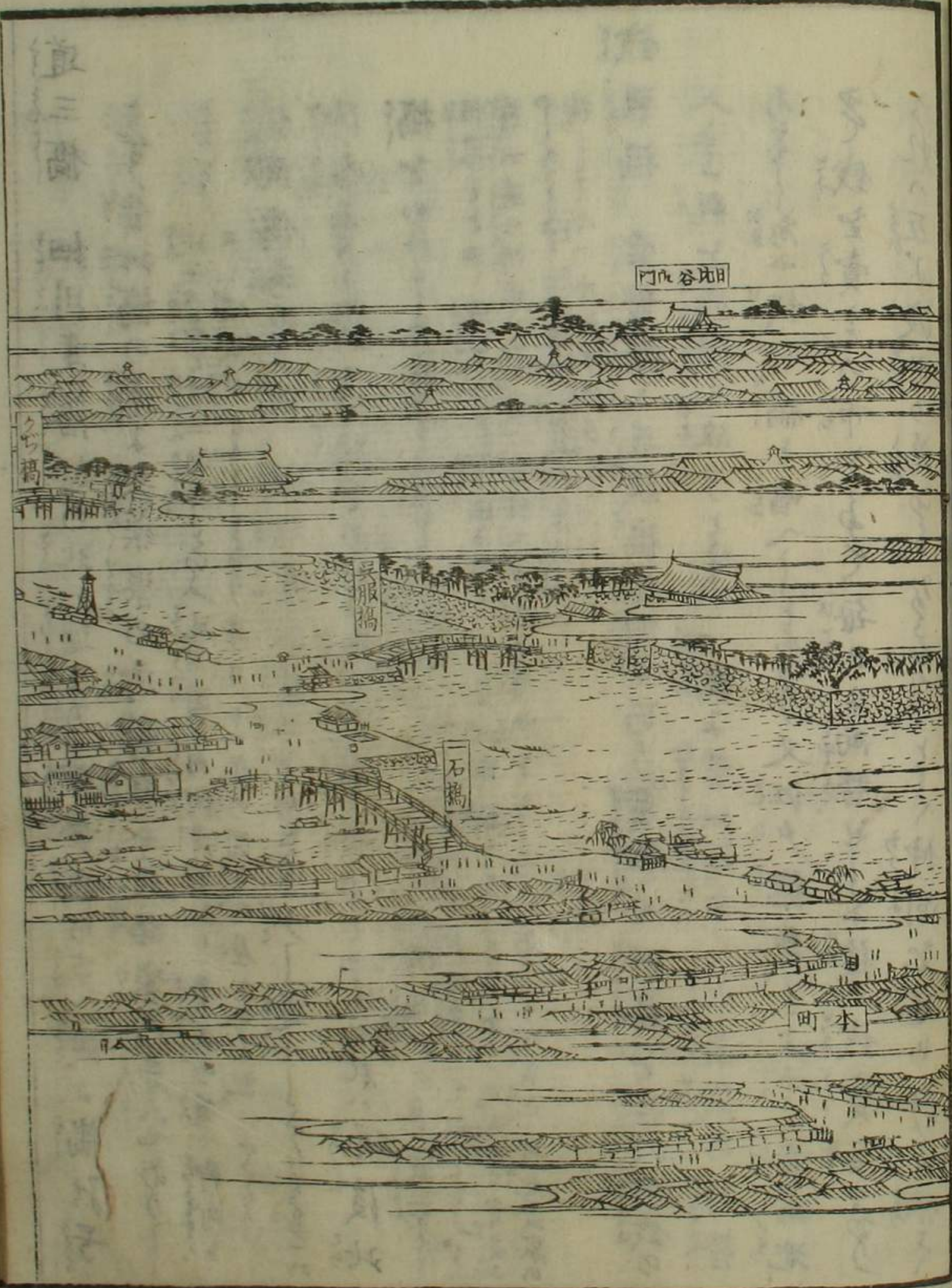
昔此辺を平田村と云 同所南の角松平右京兆弟宅

の内は平田明神の社あり 祭神詳今ハ又此地其昔を蒲生

飛騨守氏郷の宅地なりと云 龍虎梅竹橋是を合せ

法恩寺

龍



やつこ
 八見橋
 一石七の異名
 あり氏橋より
 顧望せられ
 常盤橋
 銭瓶橋
 道三橋
 呉服橋
 日本橋
 江戸橋
 鍛冶橋
 一石七を加へて
 八見と云ふ云ふ
 日本橋と江戸橋
 の間八次ふ出と
 ありと云ふ云ふ

道三橋 細川侯藩邸の北の通より常盤橋の方へ渡る橋は号

とす昔此橋の南は典藥寮の浄醫官今大路家の茅宅あり

とあり故小此を道三河岸といふ延宝園は内河岸とあり慶長の頃ハ柳町と

俗間傳云はる時 大將軍家道三をめぐり少く遅くしてり

浄智あり一取浄堀をめぐりあは其道遠しと申上るれハ後此

橋をかけしありありと

住宅と云く寛文江戸繪圖は此を去次郎橋とあり又大導寺支

箱云道三河岸入國の項林木渡世の者軒をりてあり後年彼地武家の

橋の今の本林木門是なりと云

銭瓶橋 常盤橋と呉服橋の間より昔初く此橋を架け時銭の

入る瓶を堀得し故号とす一説は昔此所あり永樂銭の引替

ありは銭替橋と唱へたり又江戸總鹿子云く昔此地

少く銭を賣との市とあり毎日両替せし後ハ銭賣多かり

これハ互ハ渡世の為めなりと云く仲間を定めける依

其頃銭買と云ると云云

寛永十八年印本なる語とす冊子ハ正十九年の夏伊勢与市と

銭瓶橋は作らる

常盤橋 御本丸の大手より東の方本町への出口中々浄門あり

橋の東詰北の方小浄高札を建らる金葉集小色かへぬ

よろしくありありの常盤の橋よかる蒸波といはる古奇乃

意を松平の御称号よりあり御代を賀しなりての号ありといはる

按は此橋の旧名を大橋といひ侍はるハ誤なり慶長十二年の江戸繪

圖ハ今の御本丸の下衆橋と大橋とあり同圖ハ常盤橋とハ

浅草口橋とありせり依る常盤橋の大橋はありと云

一石橋 日本橋より二丁半西の方同一川筋よかる此橋の南北は

後藤氏両家 金座後藤庄三郎の宅あり其昔五斗くといはる秀

句あり俗ハ一石橋と号けしあり

寛永の江戸繪圖ハ後藤橋ヤ

あり斗の音トウなり

又此橋上より日本橋江戸橋 呉服橋 銭瓶橋 道三橋 常盤



目一通

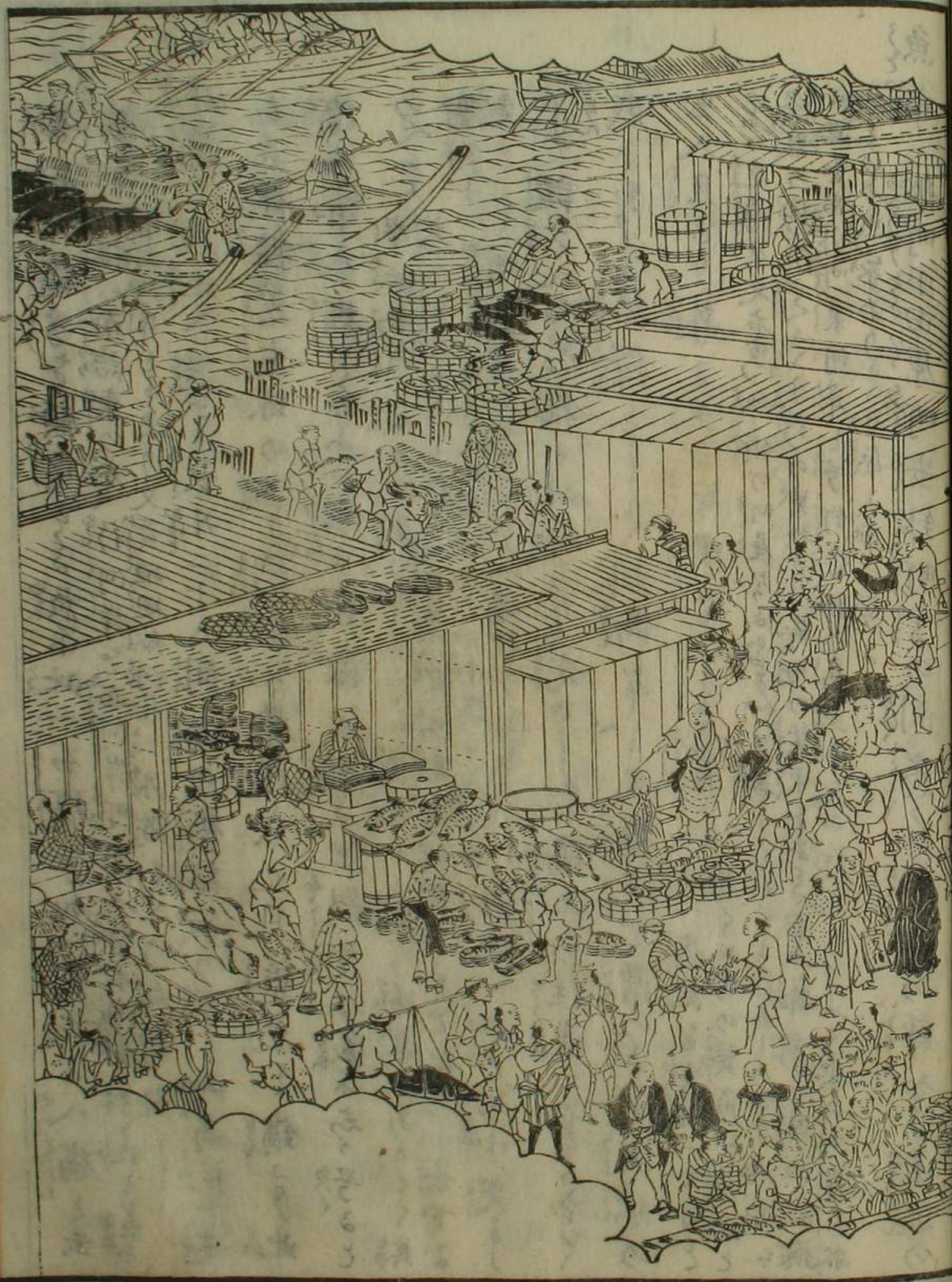


河西岸

日本橋

自是太平無事客
東関行盡幾山川
武江城上慶雲靜
日本橋頭人氣煥
翠帶紅衣常絡繹
玉鞍金轡每駢闐
相如題柱知何意
富貴從來元在天

山崎闇奇



日本橋
魚市

橋鍛冶橋を顧望する。故に此一石橋を加へて共八橋と云

日本橋此橋の南詰東の於て河岸を西河岸町と云ふ。榎木河屋多住居あり。

日本橋榎木河岸とも云ふ。又菱垣廻船向屋外諸方の舟宿あり。

日本橋南北へ架す長凡二十八間。南の橋詰西の方には御高札を建

たる欄檻葱宝珠の銘は萬治元年戊戌九月造立と鐫す。此

橋を日本橋といふ。旭日東海を如くを親見する。故に号すと

す。事跡合考は云日本橋の如くは慶長十七年の後決とあり。其

の事考へて記せり。されど北条五代記永樂城制禁の事と記せし。奈下は

慶長十一年の事。極月八日武州江戸日本橋は高札を此地ハ江戸の中央より

建てる時ハ慶長十七年より以前なりと云ふ。此地ハ江戸の中央より

諸方への行程も此あり。定めむ橋上の往来ハ貴とあり。く

賤とあり。絡釋と云ふ。間断なり。又橋下を漕つて魚船の

出入且より暮に至る迄激々として響く。北の橋詰を室町一丁目と

云ふ。尼崎屋又右馬の并領の町屋なるゆゑは響く。此の響くは此の

響くは此の響くは此の響くは此の響くは此の響くは此の響くは此の

響くは此の響くは此の響くは此の響くは此の響くは此の響くは此の

響くは此の響くは此の響くは此の響くは此の響くは此の響くは此の

響くは此の響くは此の響くは此の響くは此の響くは此の響くは此の

響くは此の響くは此の響くは此の響くは此の響くは此の響くは此の

響くは此の響くは此の響くは此の響くは此の響くは此の響くは此の

響くは此の響くは此の響くは此の響くは此の響くは此の響くは此の

響くは此の響くは此の響くは此の響くは此の響くは此の響くは此の

響くは此の響くは此の響くは此の響くは此の響くは此の響くは此の

響くは此の響くは此の響くは此の響くは此の響くは此の響くは此の

響くは此の響くは此の響くは此の響くは此の響くは此の響くは此の

響くは此の響くは此の響くは此の響くは此の響くは此の響くは此の

響くは此の響くは此の響くは此の響くは此の響くは此の響くは此の

響くは此の響くは此の響くは此の響くは此の響くは此の響くは此の

浦より海陸のけりもよく鱗魚をこゝに運送して日夜小
市を立ち甚賑へり

釜金を生くゆらんをりこり哉 芭蕉

帆をかかぬ鯛のさつとや蒸る風 其角

祇園會津旅所 大傳馬町二丁目の乾の角にあり

同屋の住す此街は年々正月十月の十九日の夜ハ其宮所ハ神田明神の

懸溝の儀として魚の形を立ちをねりてゆきハ是を八王 毎歳六月五日日本社

地より祭神ハ五男三女なり 子と稱せ 小船町を旅所とする

よりこゝに神幸ありて同八日帰興を又小船町を旅所とする

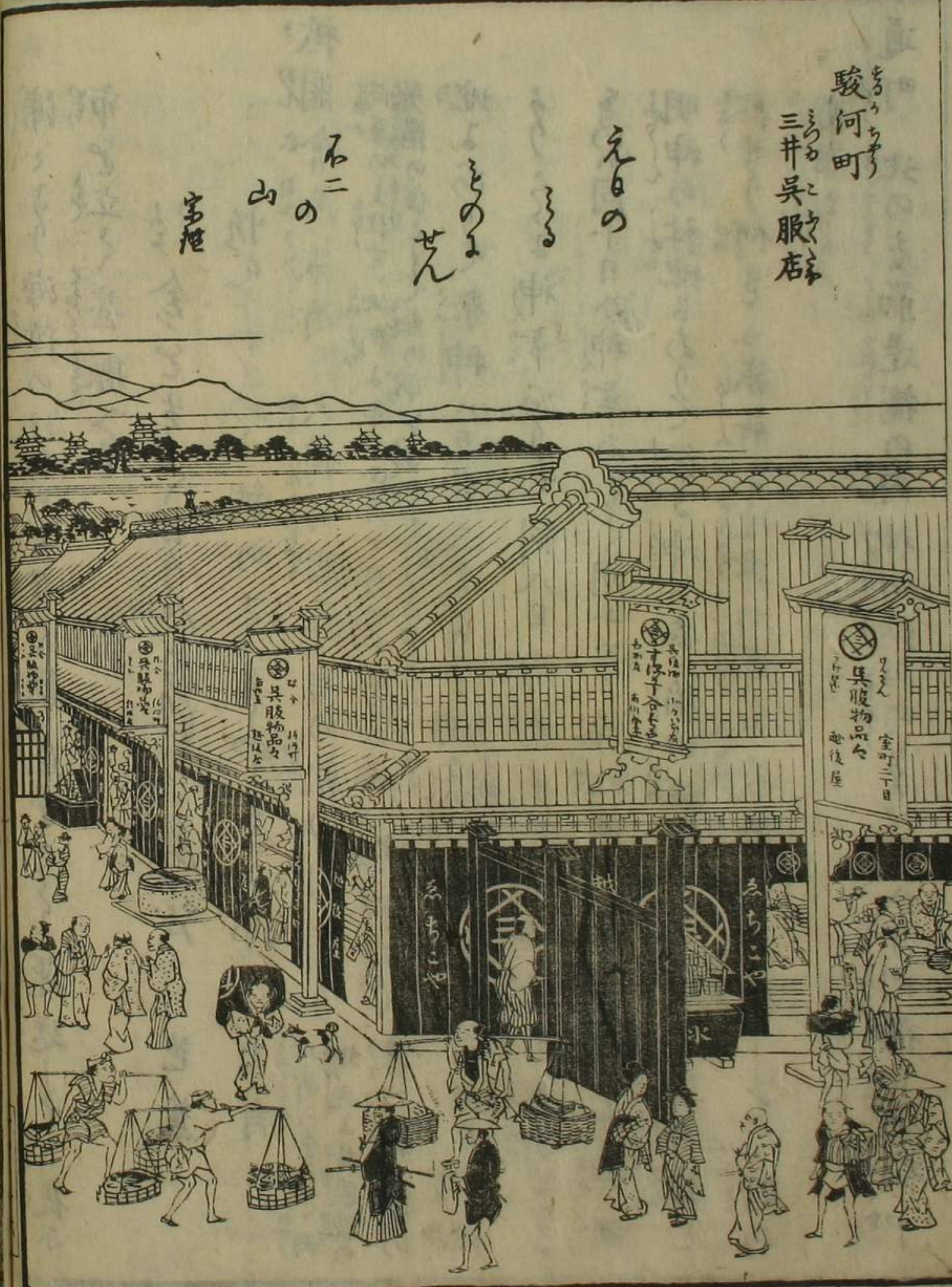
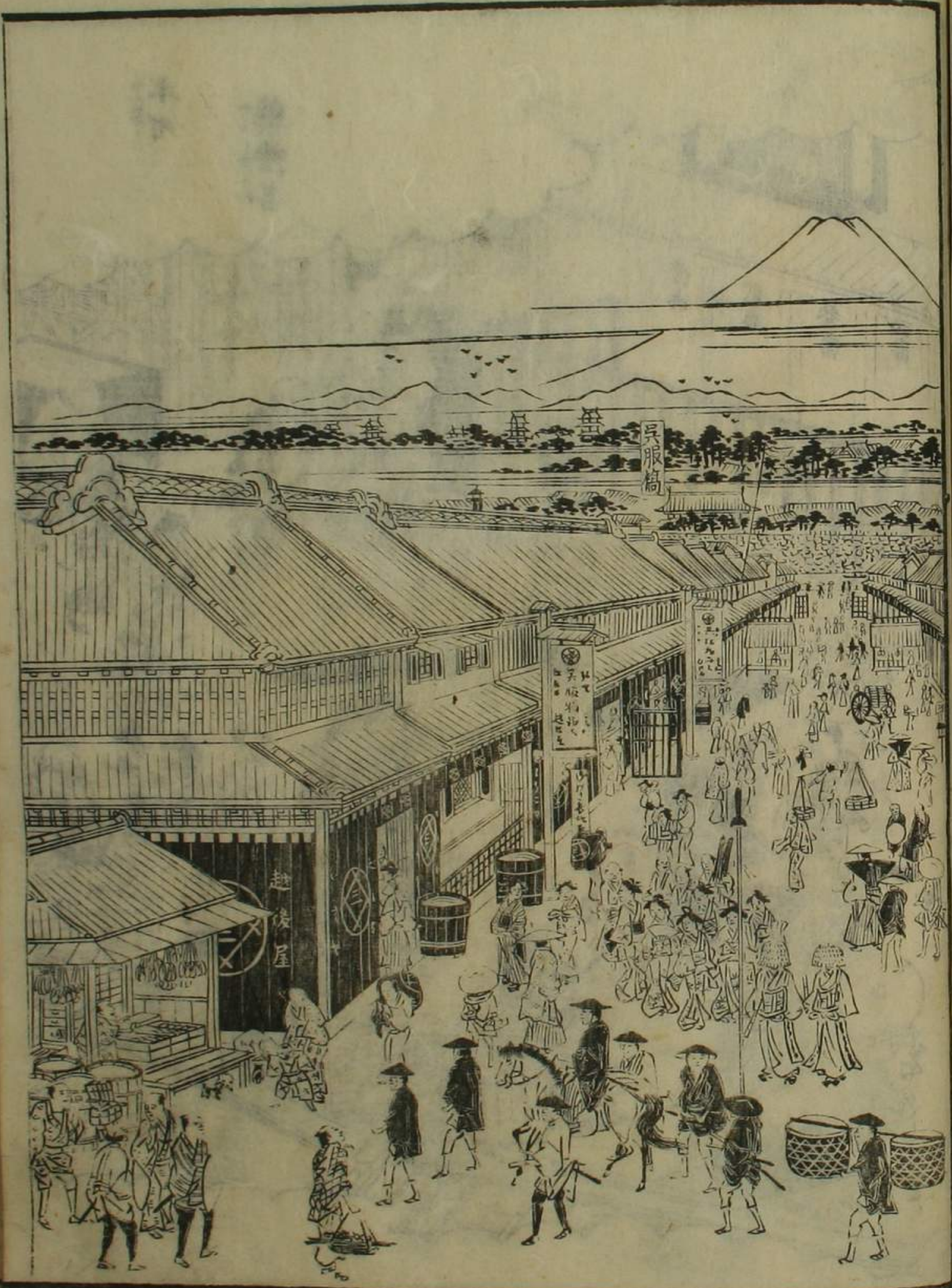
をのハ同十日ハ神幸ありて同十三日帰社あり是も宮居を神田

明神の社地にありて祭る神ハ奇稲田姫中々是を本所前と

稱せり何れも旅所は遷幸の間ハ日夜参詣群集して一時の

賑ひかり

通町 北の方筋違橋の内神田須田町より南へ今川橋日本橋中



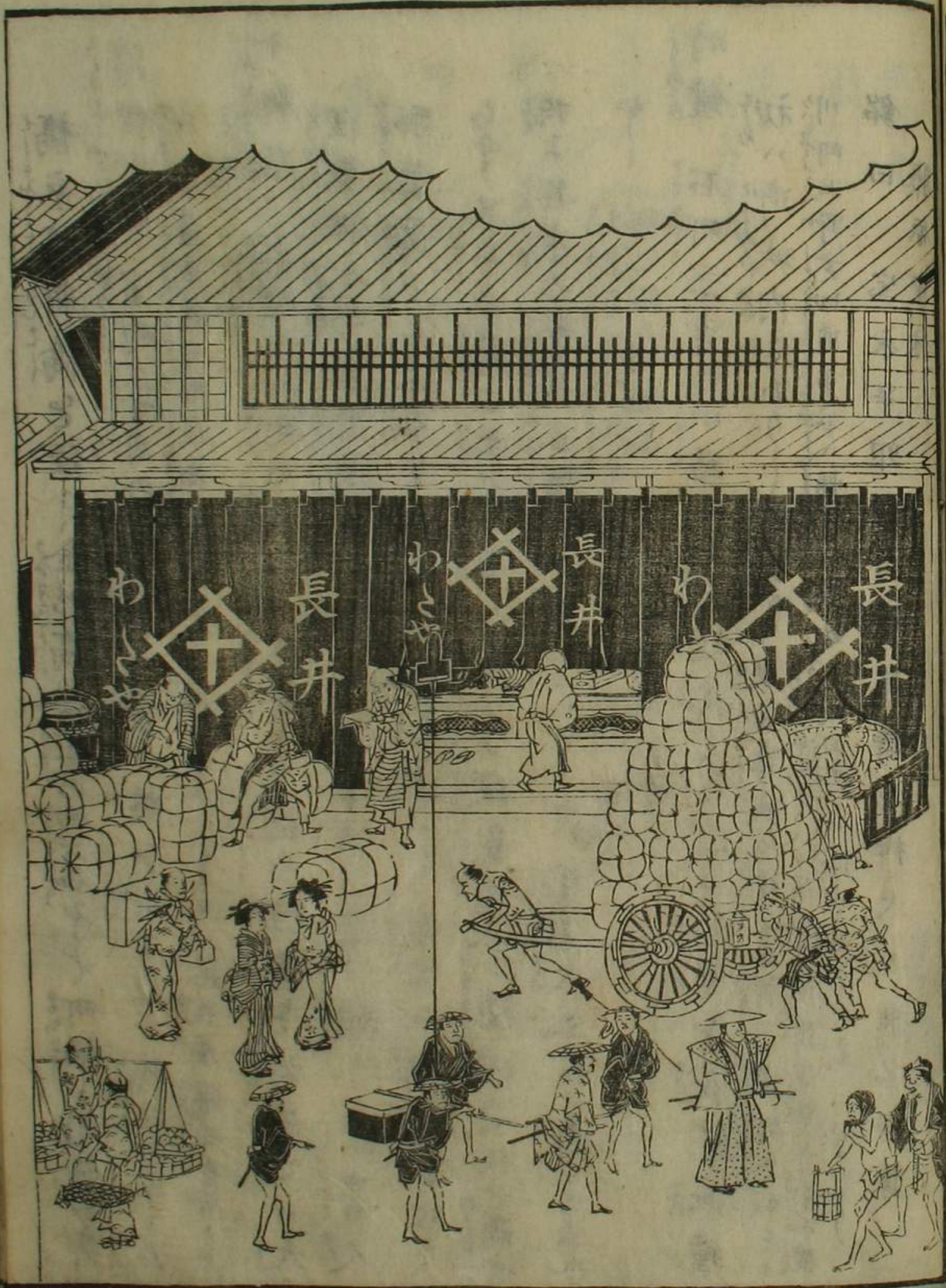
駿河町
三井呉服店

えびの

ののよ
せん

石二
山の
宝屋





大傳馬町
木綿店

長井 長井 長井

九屋 九屋 九屋 海老屋 海老屋

橋京橋新橋を徑く金形橋の辺迄の惣名やと町幅十間餘あり
 浮世小路 室町三丁目の間の東の横小路を云されと其故を考ふる
 或人云畳表浮世卧座高入りせり又ハ風呂屋遊女の居り
 十軒店 本町と石町の間の大通をりハ桃の佳節を待得て大
 裡雜裸人形手道具等ハ廊軒端を並へり端午ハ胃人
 形菖蒲刀らふ市を立く其賑ひをり 弥生の雜市よれ
 らす又年の暮に至れハ春を迎へ破魔弓手毬破胡板を商
 共ハ其市の繁昌言語ハ述尽すへり 實ハ大平の美とも云
 か 駒込ハ尾張町浅草野田池の端神町麹町
 時鐘 石町三丁目の小路ハ源七といはる者是を役す此鐘
 初ハ御城内ハありと云り 其餘都城の鏡子ハ有候時を報する
 川町上野芝切通市谷ハ幡目白不動赤坂田町成満寺四谷天竜寺等あり
 銘曰 宝永辛卯四月中浣鑄物御大工推名伊豫
 藤原重休



祇園會
 大傳馬町御旅所

五元集
 天王の山藤本と
 拜せ

里のみ

お宮

いこ

教

其角

山崎
 山崎

小舟町
祇園會
御旅所



五元集

祇園の
かりや
ちりや

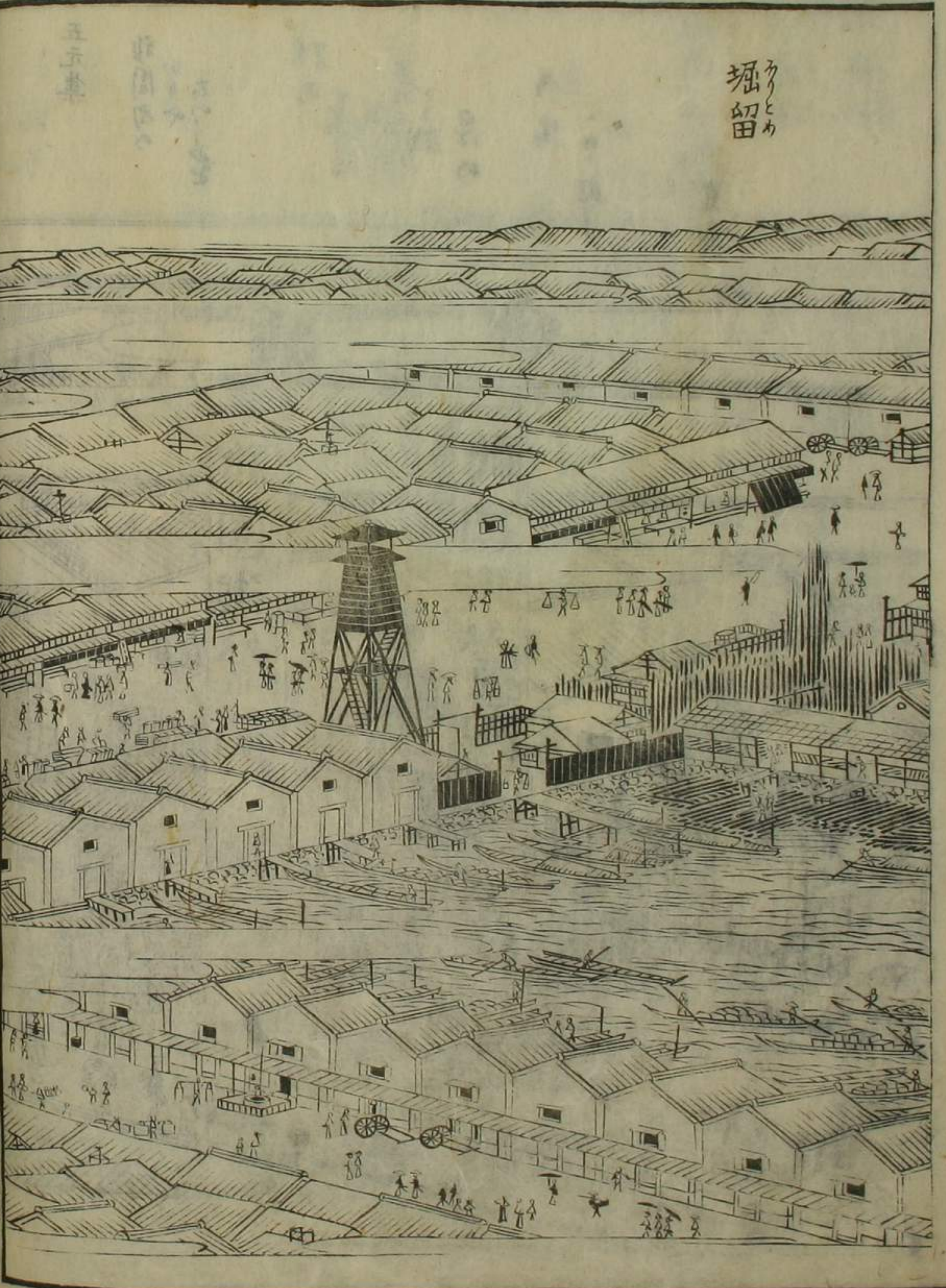
杉の
まわし

者
の
月の

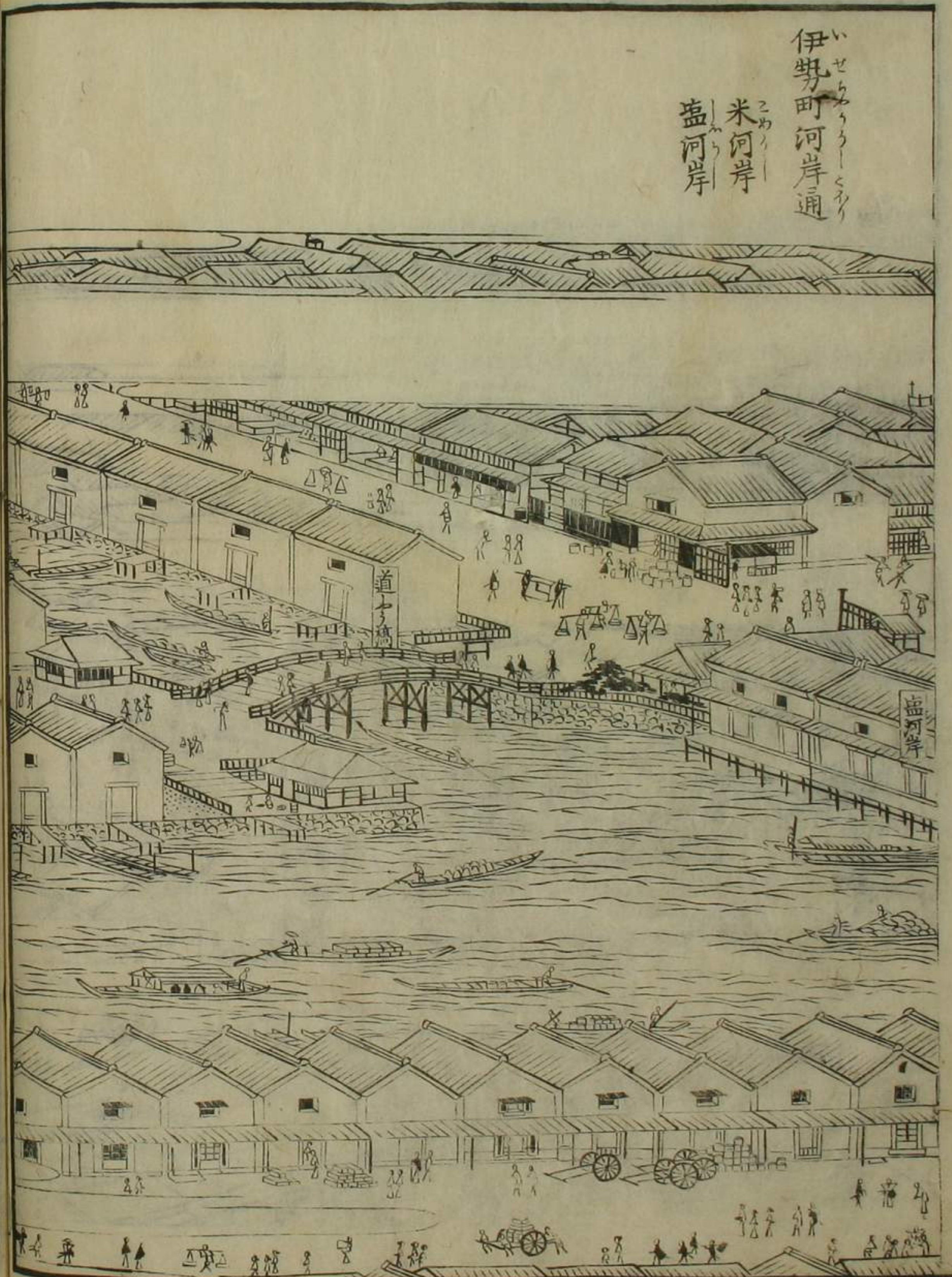
清
松
の
那

其角





伊勢町河岸通
米河岸
塩河岸





十軒店
雜市

内表紙

人形

まじりの

浄宇

とよ

芭蕉

板宝永七年十二月十九日誓願寺前より出火石町のあり焼七すも頃此

鐘山焼くりか不登る宝永八年鑄直されりあり

福田村舊跡 本石町一二町本銀町一二町の辺其舊跡なり云

傳入 大久保主水屋敷内小福田稻荷と稱する宮居ありむ

千代田村舊跡 鏡炮町のあり昔の千代田村ありと云り

千代田稻荷といふ小社あり相殿に諏訪明神を勧請す此地の里

寛正中太田道灌の弟千代田若狭守の勸請なり此名ありとされ

本銀町封疆 明暦年間火災を除くはめんは是を築くも

今川橋 本銀町の大通あり元乗物町へ渡橋を云此堀を神田堀

と号く元禄四年辛未堀割るると云頃此地の里正と今川某と

又此北詰の西の河岸を主水河岸と字を御菓子司大久保主水

の宅ある故ある云り宅前より井あり主水井と云昔ハ茶の

水ありとせられしと云り

水ありとせられしと云り

水ありとせられしと云り

神田明神舊地 神田橋の内一橋伊館の中より清浄と

今程存せしなり 隔年九月十五日祭礼の夜ハ神輿を

村と云 小田原北条家の古文書ハ太田大膳亮 其昔ハ浅草の日輪寺も

芝崎道場といひく此地よりあり又神田と号するハ傳へ云

往古諸國伊勢大神宮へ新稻をまきる故小國中至稻を植る

の地あり是を神田或ハ神田河田と唱へしなり此地ハ當國の

神田なり故大已貴命ハ五穀の神なれハと云ふ齋と云

神田橋 大手あり神田への出口小架を御門あり昔此地ハ土井大炊

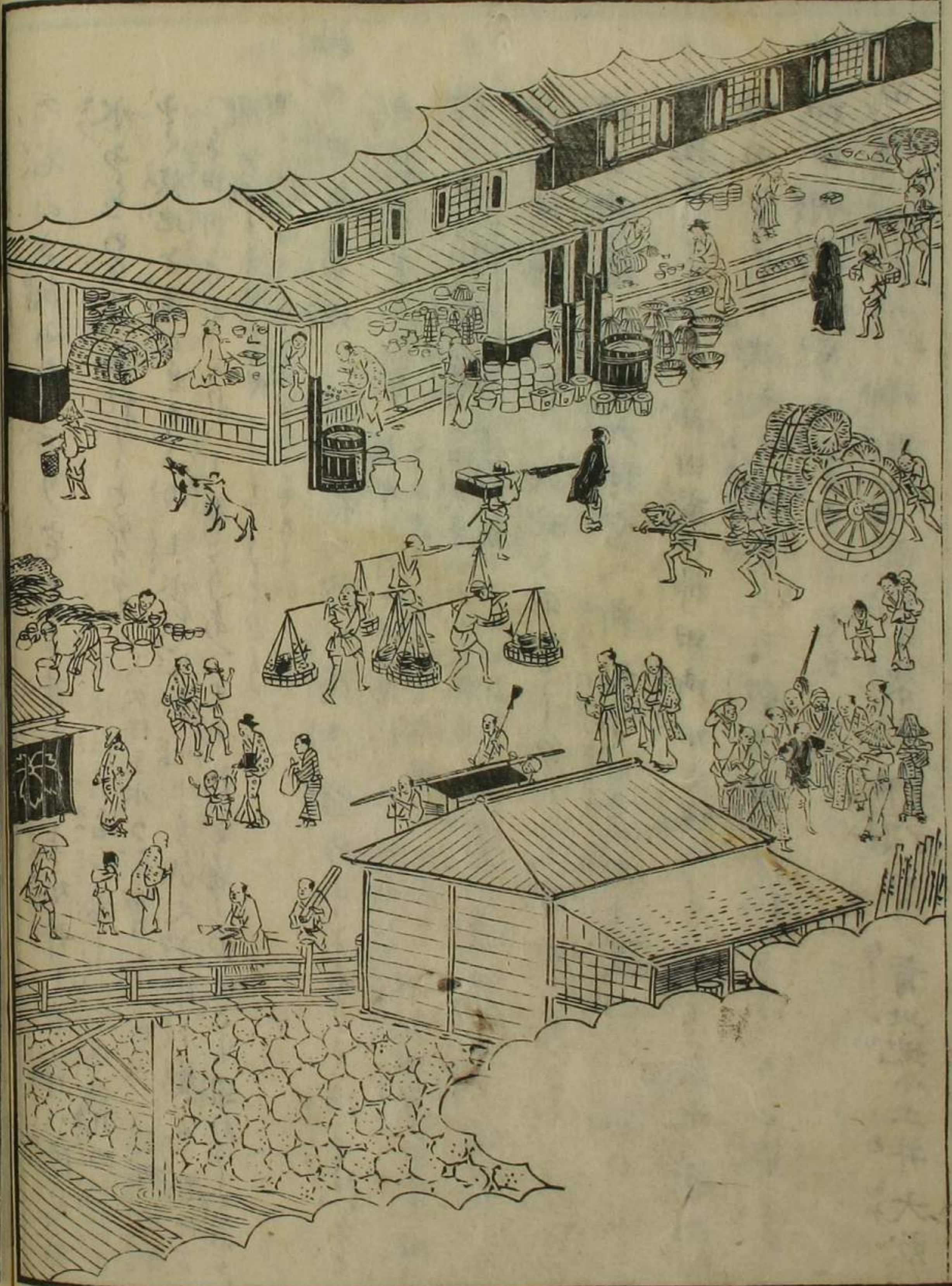
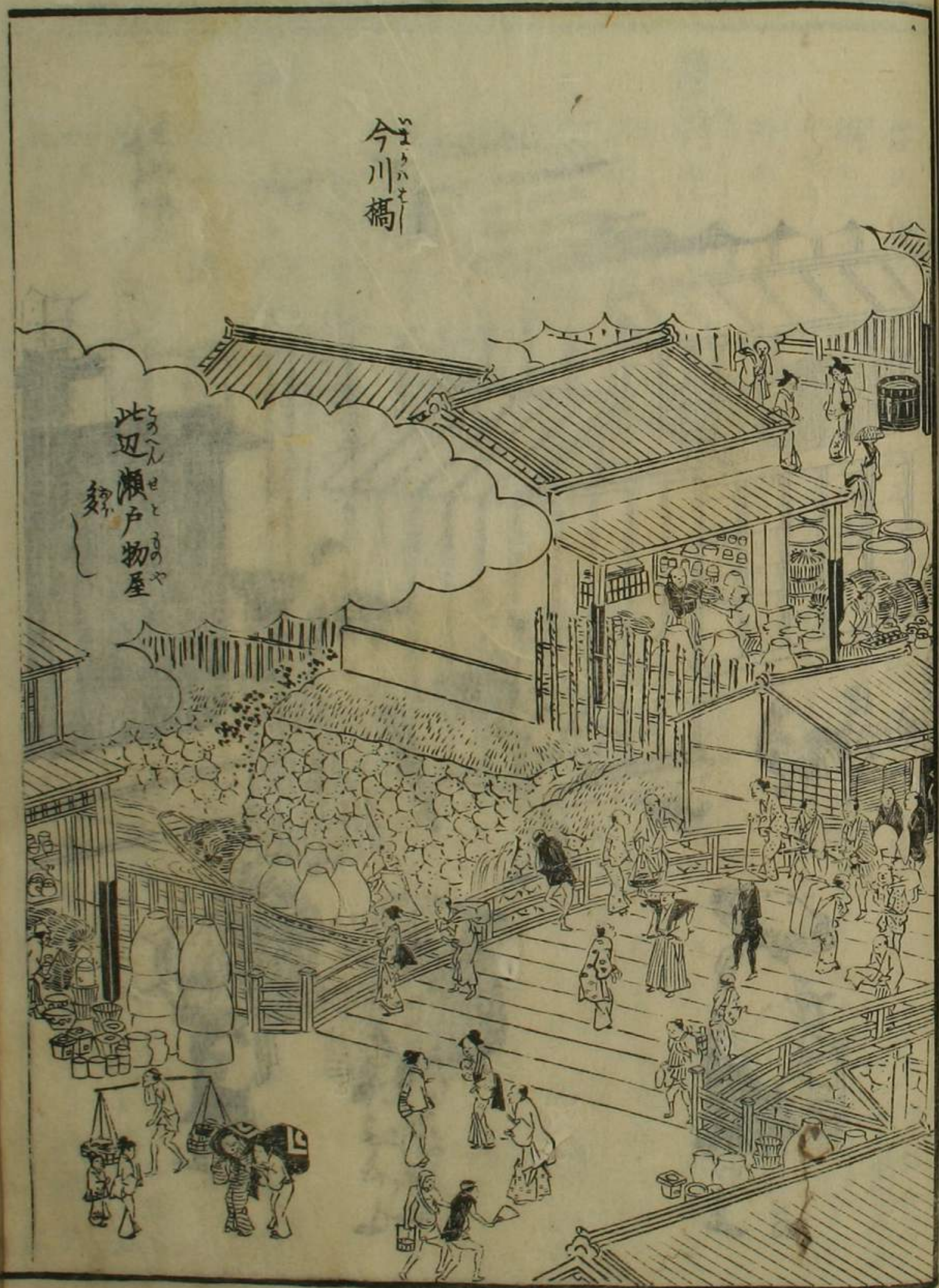
の地あり是を神田或ハ神田河田と唱へしなり此地ハ當國の

神田なり故大已貴命ハ五穀の神なれハと云ふ齋と云

神田橋 大手あり神田への出口小架を御門あり昔此地ハ土井大炊

今川橋

此辺瀬戸物屋



主水井



侯の弟宅あり一故小又大炊殿橋とも号するところなり
橋の外小茅商人あり住す今八丁堀の茅場町是なり又平後
中河ゆきとさき今中河の茅場町ともいふこのたなりと云く
外の町をまじり神田と号く

護持院舊地 神田橋と一橋との間沙溝の外の芝生を云此所を

大塚護持院の舊址なり 元禄年間柳原の南あり知足院を引き

田録の邊大塚の地へ 林泉の形残す頗る佳景なり 夏秋の間八景を

移され後明地と号す 雨うせしと都下の人々遊ふをゆるさる冬春の間八時とて

大将軍家々々沙遊獵あり故に此所を新駒ヶ原とも唱ふる

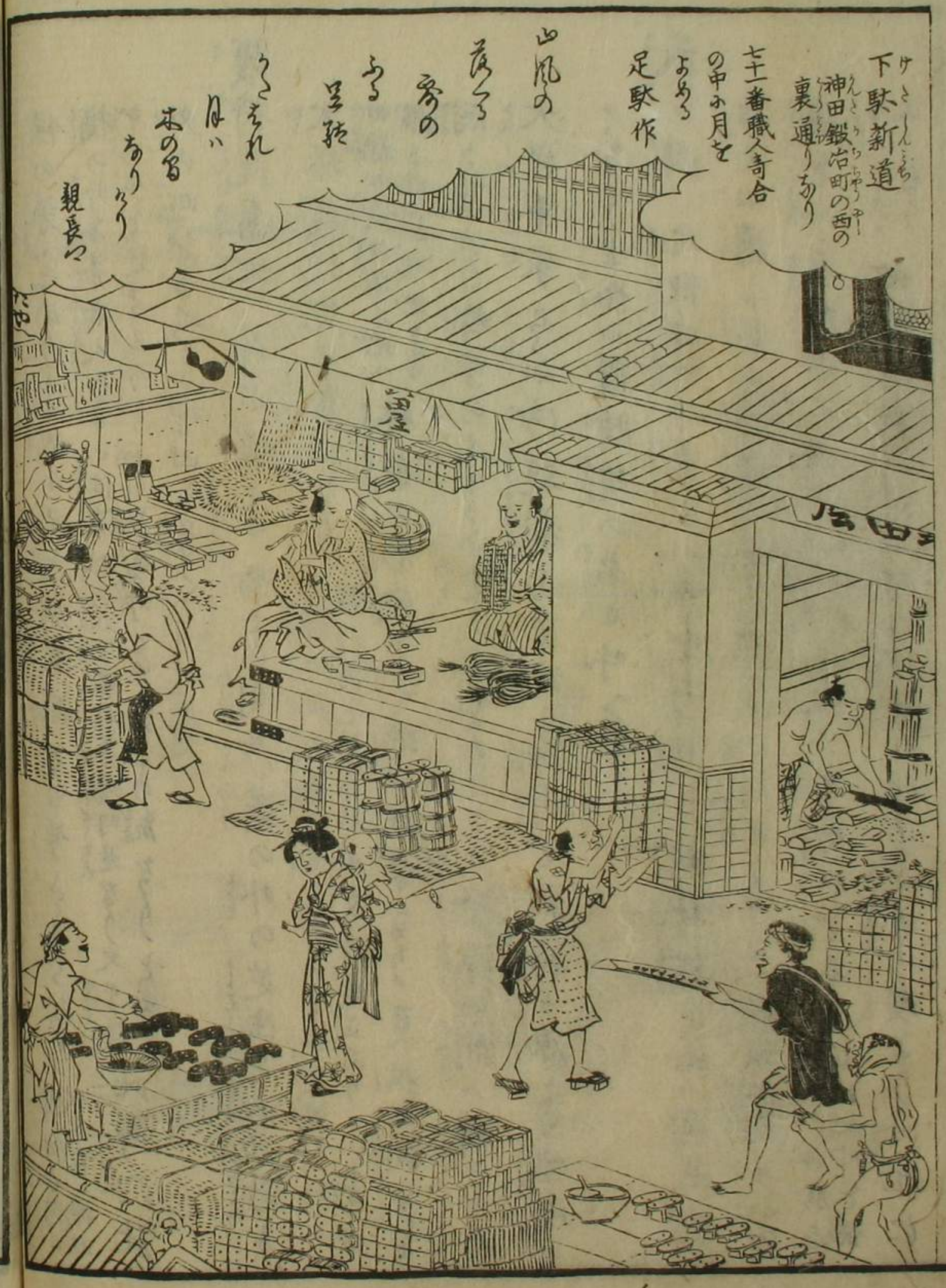
と号り世俗ハ護持院の系と呼ぶ

菰ヶ淵 元飢田町の東の入堀を号く 懸蟀橋と云ハ同所北の

方の小溝に架む石橋の号なり又小川町より九段坂へ向ふ所の

橋を今魚板橋と唱ふ 又姐橋と云ふ所を号く 江戸名勝志

田川と云ふ 世継稻荷ハ飯田町の中坂より文安の頃より此地に



鎮座ありと云傳ふ

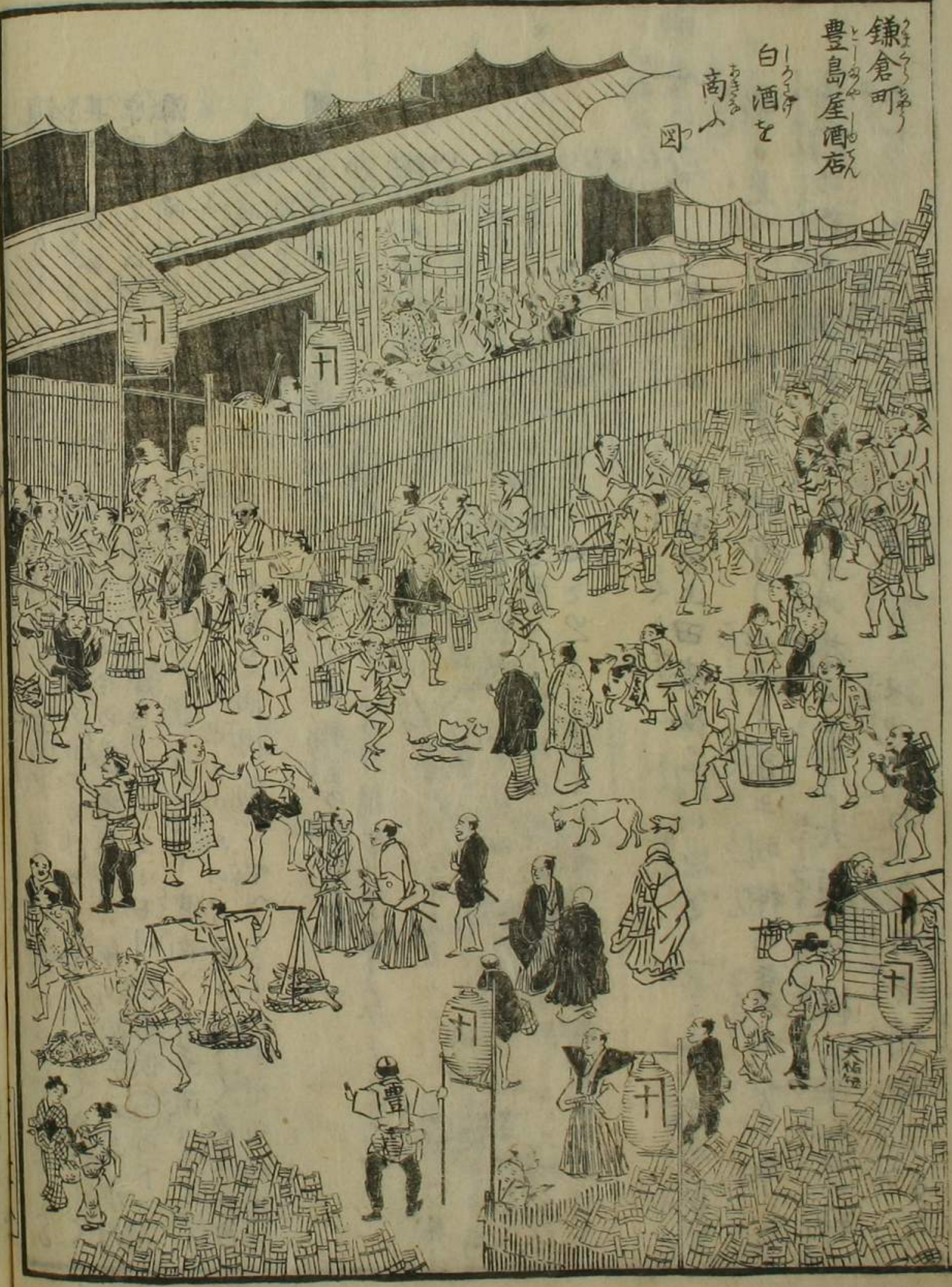
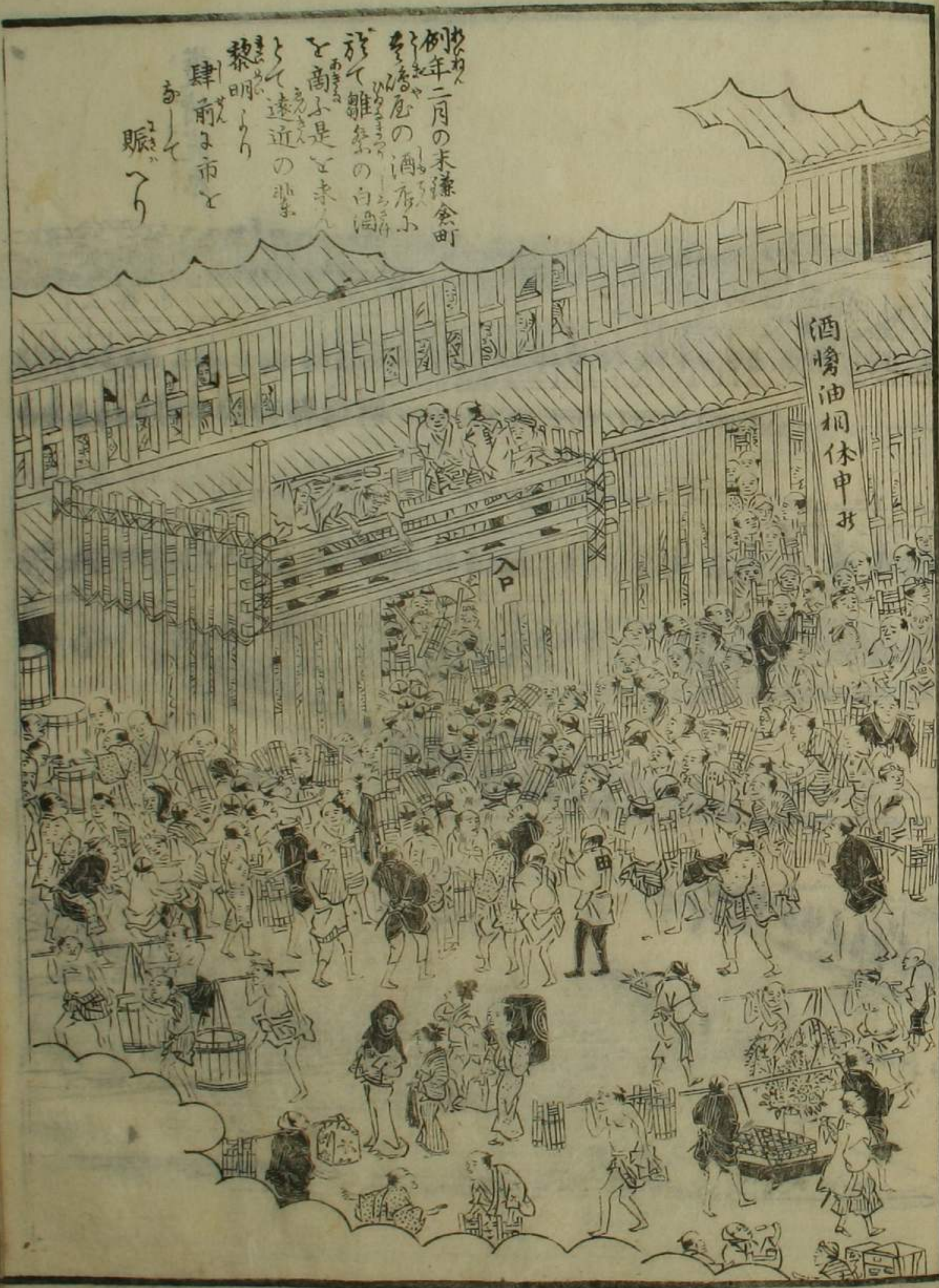
南向亭云く天正の始のまに神廟の結構出来たる
 其頃ハ市谷長圓寺谷ハ大沼あり今ノ揚場町昔ハ船河原と云其船河
 原の辺をりの沼水流と云此入堀の所へ賣きと云又小石川根本侯橋の下の水
 流も三崎稻荷の辺より小川町を經一橋より少東南へありて流ると云
 按よかく小川二筋逆流地ハ後世小川町の号起り今ハ平
 讀岐炭の南の方の小溝の石橋を油摺橋と唱へて小石川の水流の
 旧跡ありと云

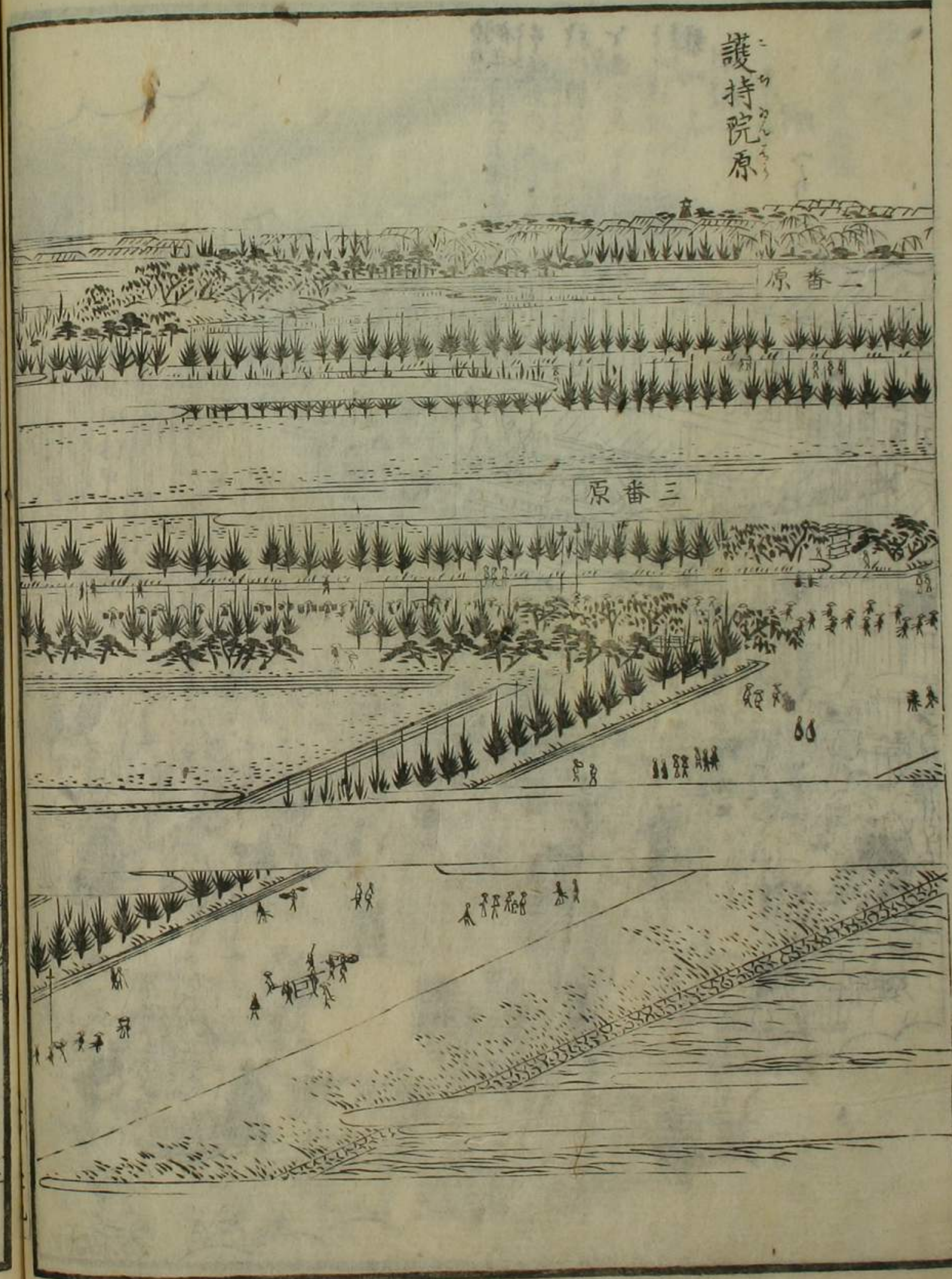
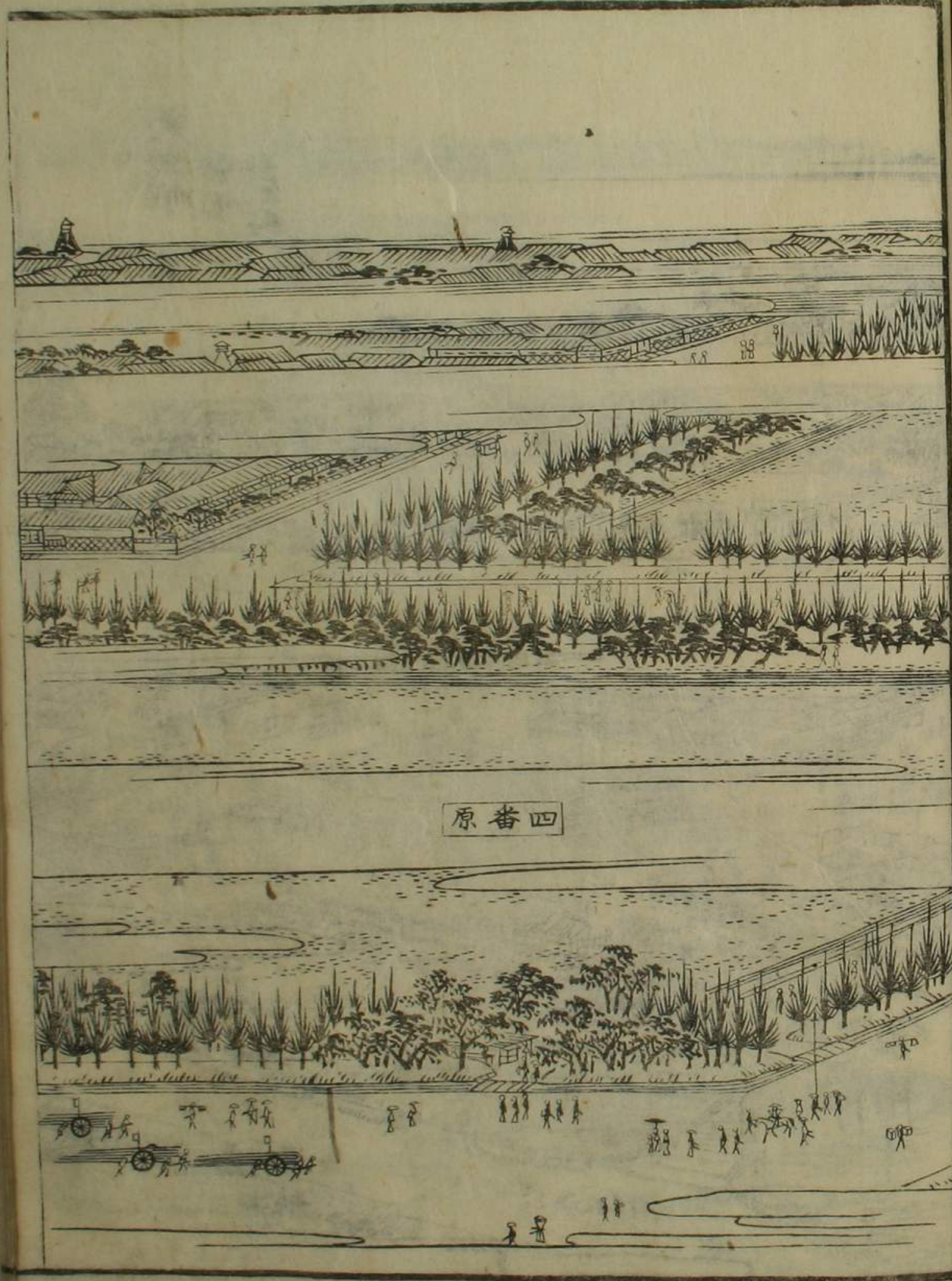
関東古戦録 太田道灌江戸城あり一頃眺望の和歌と云
 むとせり小川の清きと云るの根柢をありひとせり

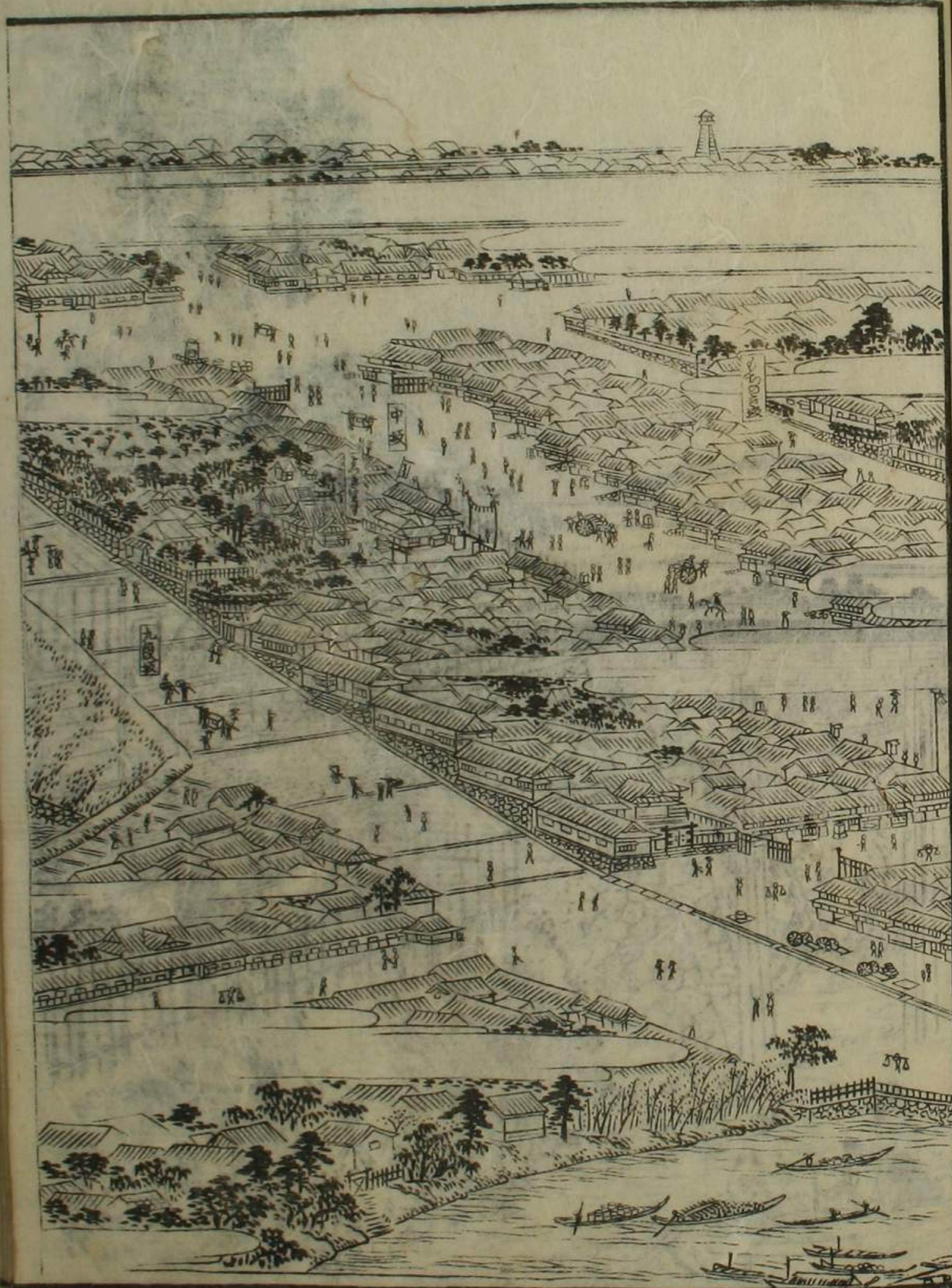
按此歌風調と云るをいへり其地ハ堪ていへり其地ハ堪ていへり其地ハ堪ていへり
 小川の清水と号するものハ小川町内藤大和彦の庭中ハ存神田ハ淵と云
 内藤大和彦の説なり江戸名勝志ハ云く神田ハ淵ハ内藤大和彦の
 内ハありと云く小川の清水と云なり即神田明神の清ハ洗と云又按よかく
 内藤大和彦神田明神中古の旧地と云るなり其地ハ松平備前彦のヤリあり
 彼是混雜せりありと云

田安の臺 元飯田町九段坂の上田安御門の辺と云く東南の方を

斜に見下し佳景の地なり此所ハ築土明神の舊地あり牛込
 御門の内米倉家の所なり此構の前ハ大榎一株あり昔の神
 木なりと云傳ふ築土明神昔ハ此地ハありと云安明神と稱し

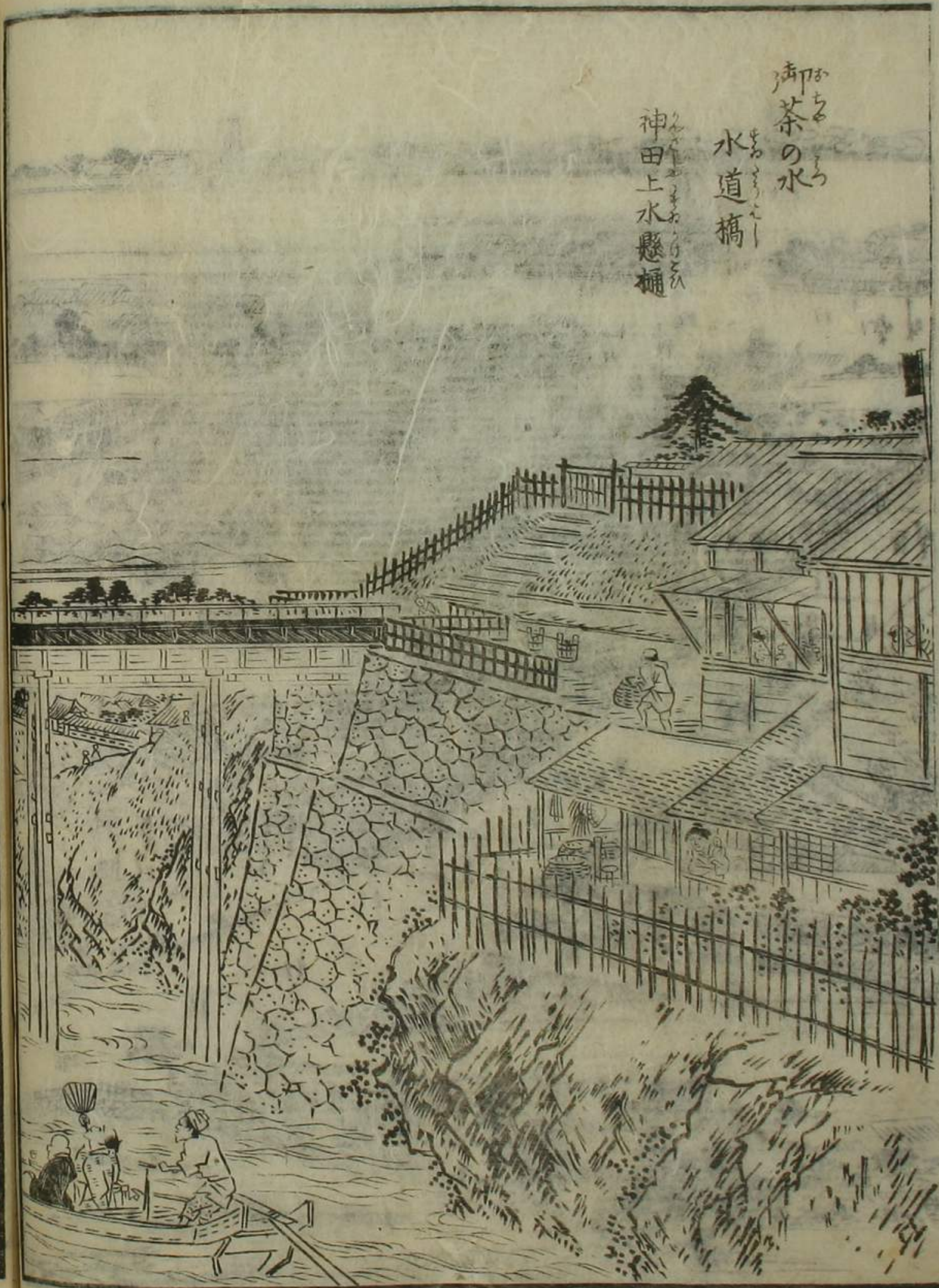




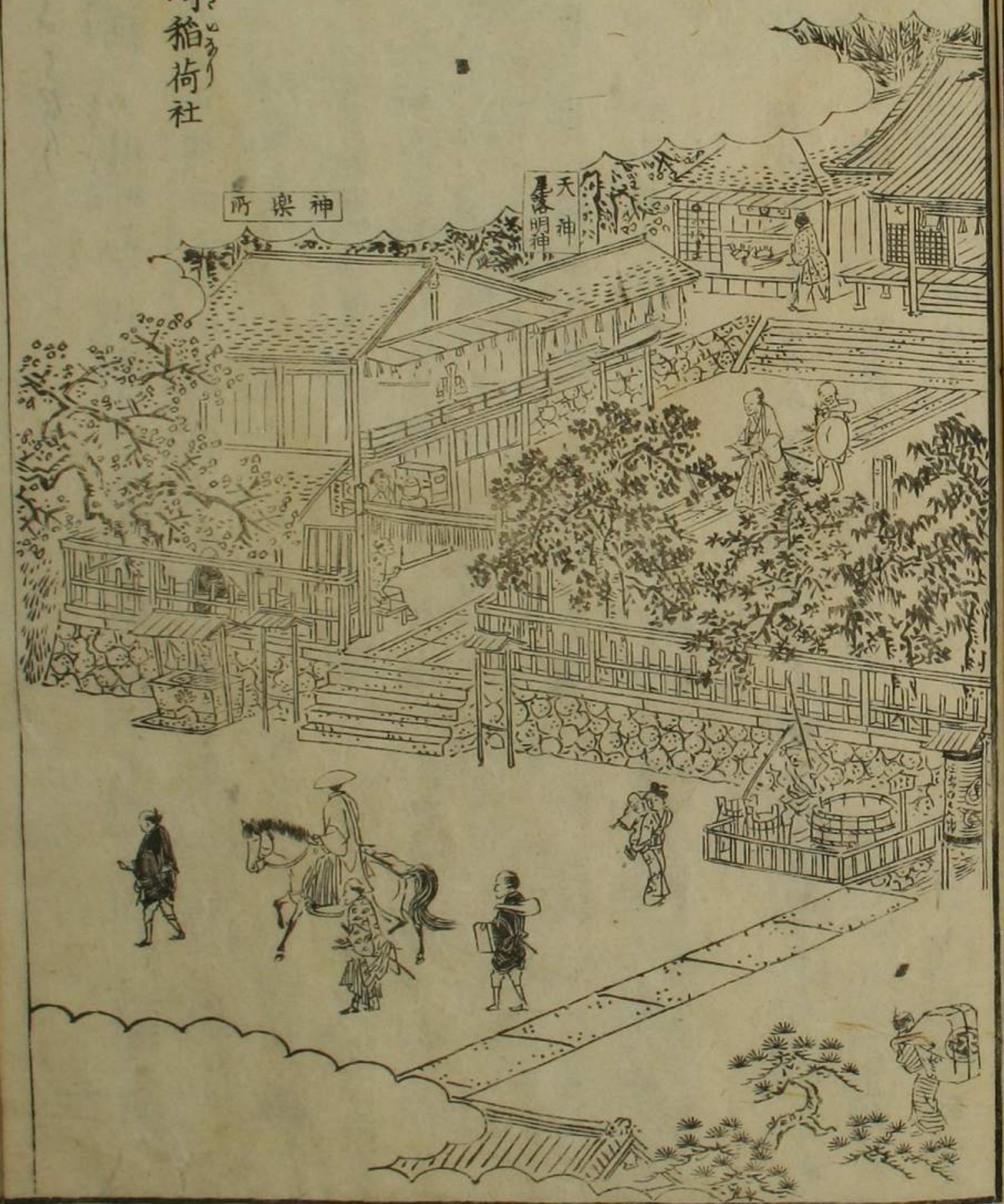


飯田町
中坂
九段坂





三崎稻荷社



本社



たるとなり

水道橋 小川町より小石川への出口神田川の流し架を此橋の以り

下の方小神田上水の懸樋あり故に号とす

此下の川は万治の頃迄駒込の吉祥寺此地あり其表門の通りふ

ありしとて此橋の舊名を吉祥寺橋ともつり三崎稻荷八同

西の方土堤は傍てあり此社ある故南の街を稻荷小路と号く

社記云當社ハ古の勸請也年代不詳近ハ天文七年小田原北条氏綱は

造営しりと又云此地ハ昔三崎村といひんとて因三崎のありとも

駿河臺 昔ハ神田の臺と云此所より富士峯を望むは掌上に

視る如し故に此名ありとて

筋違橋 須田町より下谷への出口中々神田川は架を河にあり

此所あり御高札を建らる此前の大路をハッ小路の辻と字す

昌平橋ハ是より西の方小並湯島の地小聖堂御造営あり

一より魯の昌平郷は比しと号けられとなり初ハ相生橋

あつり橋又芋洗橋とも号ゆるり太田姫稻荷の

祠ハ此地終路坂の上あり旧名を一口稻荷と稱す

新國會ハ又東小柳森稻荷社あり並に拾遺

神田川 江戸川の下流中々湯島聖堂の下を東へ流大川は

入明曆より万治の頃小至り仙臺彦 台命を奉り湯島

の臺を堀割小石川の水を初てろろ小落と云傳ふる

少く誤る似たり古老の説ハ慶長年間駿河臺の地開け

一恥小至り水府公の藩邸の前の堀と浅草川へ堀つて

其土を以り土堤を築き内外の隔となりと云此説あつる

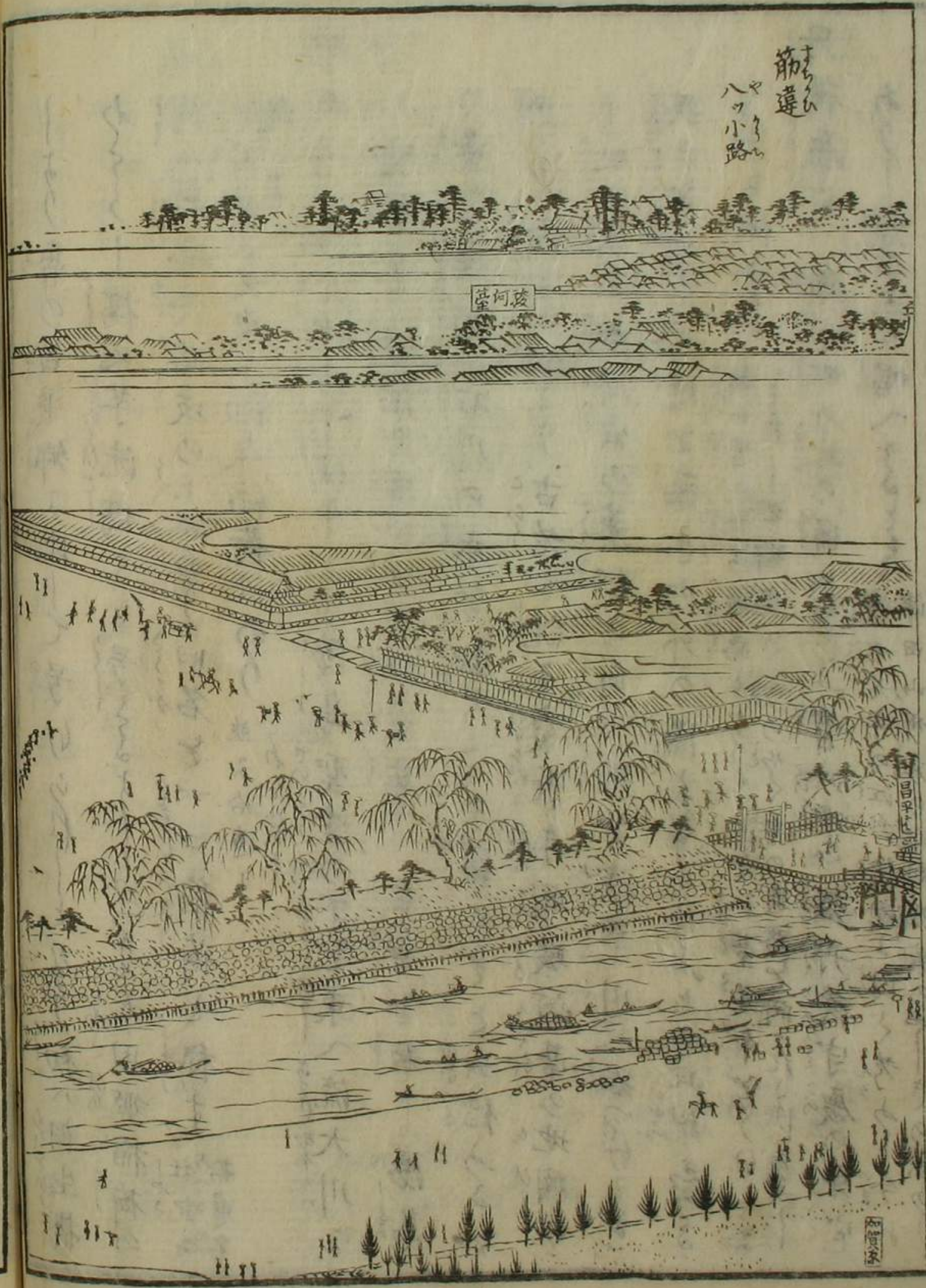
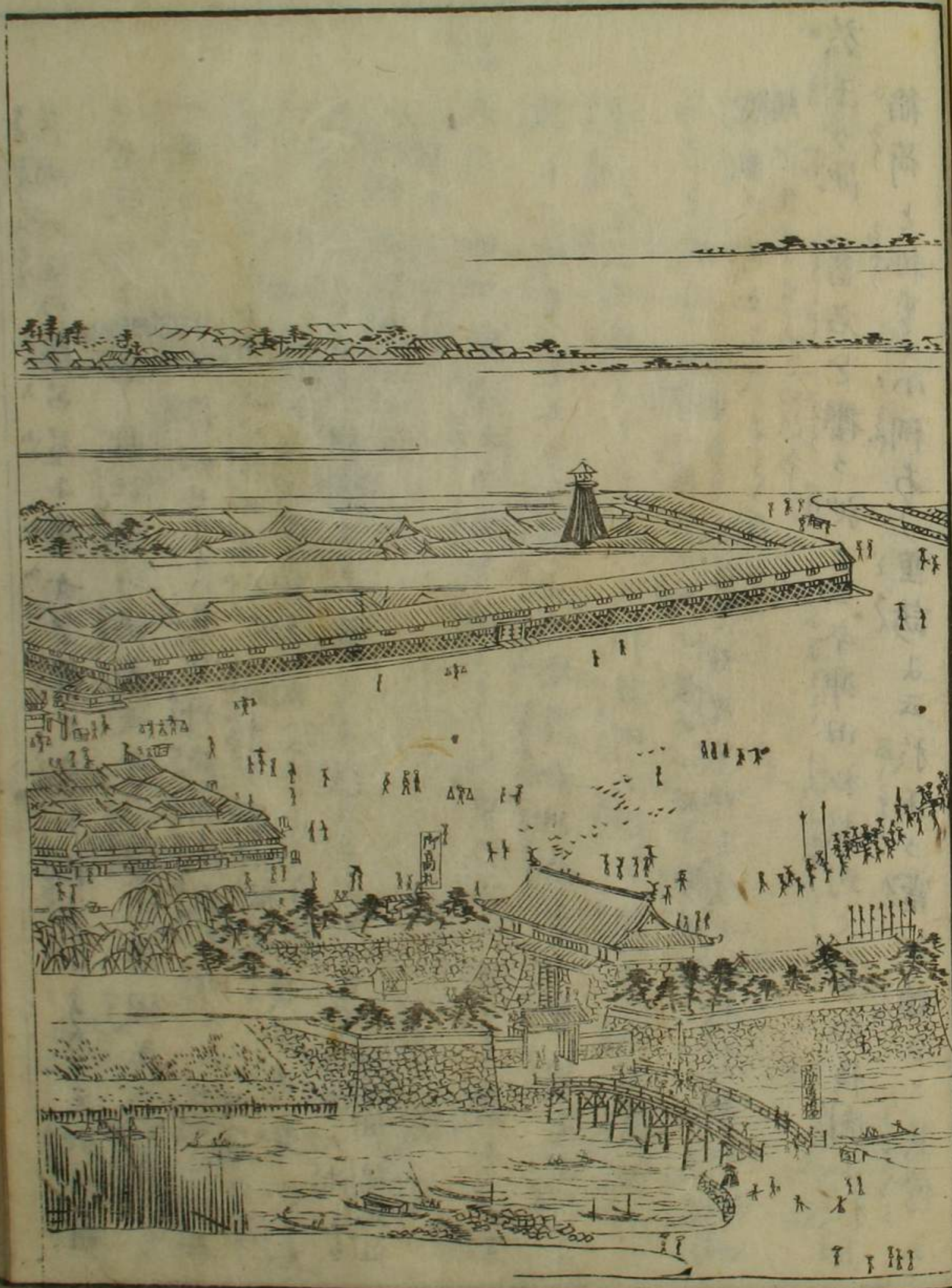
へきも似たり 按小昔ハ舟の通路を仙臺彦命とけたま

丹後殿前 雉子町の北の通り

寛永九年の江戸繪圖に因り考ふ今此

ありしとて

津田山州彦の地則堀家のやききの跡あり





藍深川

其頃此辺の風呂屋小湯女を置いて客を招くより又六法組
 とく武夫中もあつぬ壯年の俠夫大小立髪たてかみの異風いふうある出立いだしわく
 此風呂屋の辺を徘徊せしむは是を丹前六法風と呼ぶ
 今此地いまこのち清水屋しみずや掘川ほりがわ杯は湯屋ゆやあり則昔すなはちの湯女風呂ゆめふろ
 居いあつ狂言きやうげん子取組こどりぐみ名も丹前にまへとよひさるとなり
 白柄組しろがらぐみ鏡棒組かがねぼうぐみ唐犬組からいぬぐみ
 藍深川 神田鍛冶町の通を横よころく東の方へ流る溝あり里
 諺ことわざ一町いちまちろく上あり南北の水落合みなみきたの水おちあひ此所このところゆる會流あひなみゆる故ゆに
 逢初あはれと云の儀ぎよとらふ云又狎屋町あややまちの辺を流るながるる藍深川と
 云とととこの溝ほりの端は鍛冶町かじやまちの裏うらの小路せうぢは兼善院かねぜんいんといふ真言しんげん此
 常とこ亂らんの侍女さむらいめよ代しろりの自みづからの頬ほを焦やするといひあつハセリ
 於玉おたま池いけ 舊名ふるなを櫻さくら池いけと云今神田松枝町人家かみだまつえだぢやうにやの後園ごごは玉
 稻荷いなぎと称なづする小祠こまつだあり里諺さとことわざ云於玉おたまの靈れいを鎮まつると其傍そのそばは

丹前六法後
 前まへの略語りやくごなり
 後のち小奇舞せうきぶ妓きは
 所謂いふ六法ろくぽうと
 神かみ浪なみ組ぐみ 鶴つる鷄けい組ぐみ



於玉子池の
古事



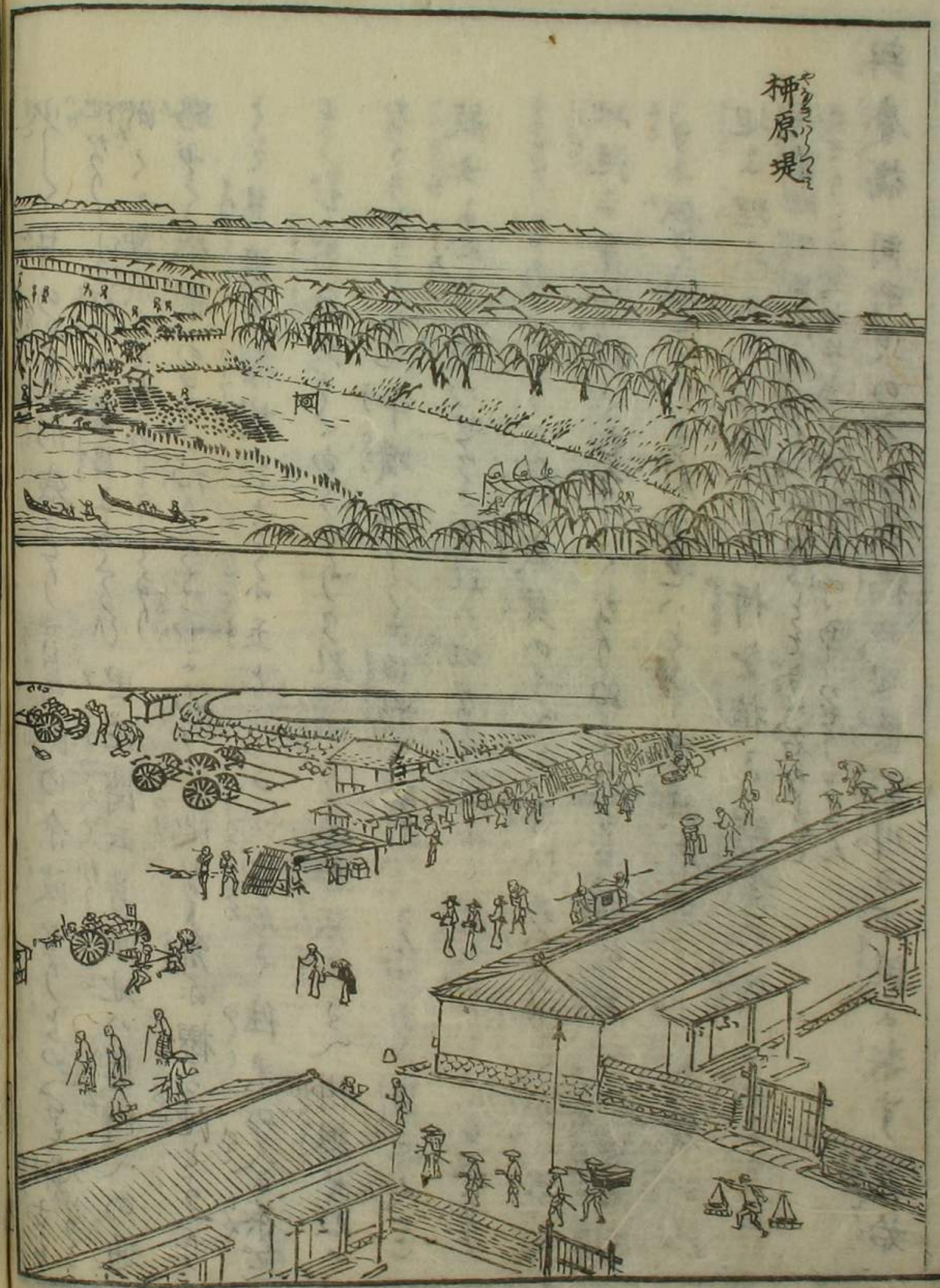
弁慶橋



少く井のあき形残まり昔の池の余波なりとて
 池のあき江戸の繁昌よあつひ
 路ゆく櫻樹あまのぼりあり池なる小櫻り池とあり
 とそ其傍の櫻樹のこころ玉とて女物居く往來の人茶を
 まむ容色大くあつり心とめぬ旅人さへ掛想せぬハ
 なりりきとらん中頃人々も品形もあつりさへある男二人を
 彼女よ心を通りせざるされハ切なる方をも思へとも
 まさるもあつりされハ我身のへを思ひあつひ女ハ終り
 此池よ身を投ぐむなりぬさ終る津の國の求塚の古
 り小似くともあそれあそハとて里氏打寄く亡骸池此
 迎よ埋みある一々柳を植く記念の柳とハ号ると云
 其舊址明番の面録とて今ハ谷の
 存せりこの池とて呼あつりせりとも

辨慶橋 同所東の方和泉橋の通蓋赤川の下流に架す其始

柳原堤



楊柳隈春堂
十枝交影拂紅塵
請看鳥金絲色
總映青雲馬上人
高維馨

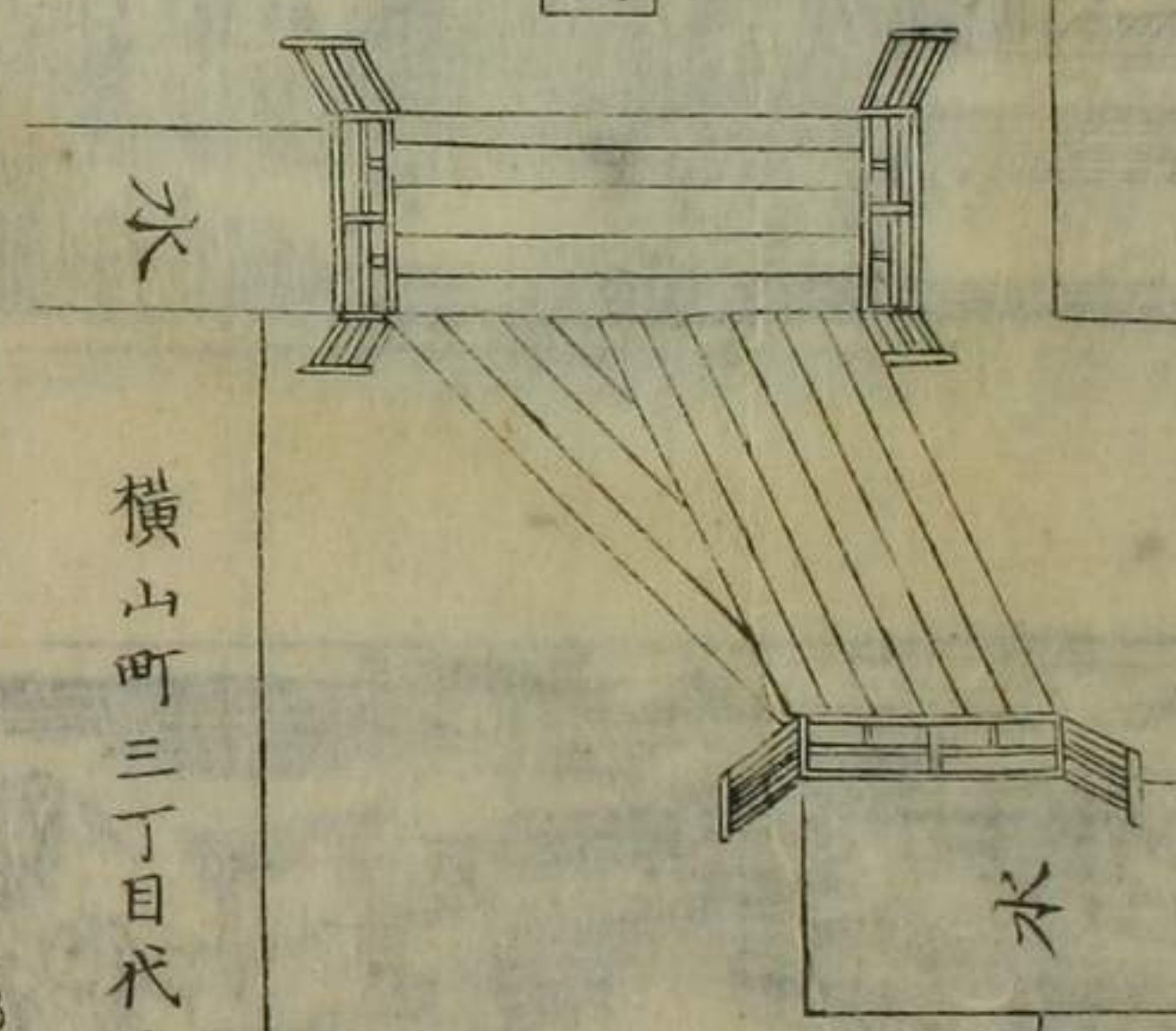


西大工棟梁辨慶小左衛門といつる人の工夫ありて懸初しと
 して此地の形に應じ衢を横切り筋替はかる尤奇なり

岩本町

松枝町

辨慶橋之圖



元岩井町

横山町三丁目代地

柳原封壇 筋違橋あり 浅草橋へ續く其間長凡十町あり
 享保年間此所の堤小悉く柳を栽せしむ 寛永十一年の江戸繪圖
 堤の外ハ神田川なを又此堤の下ハ柳森縮荷と称する叢祠あり

故に此地を稻荷河岸と呼へり

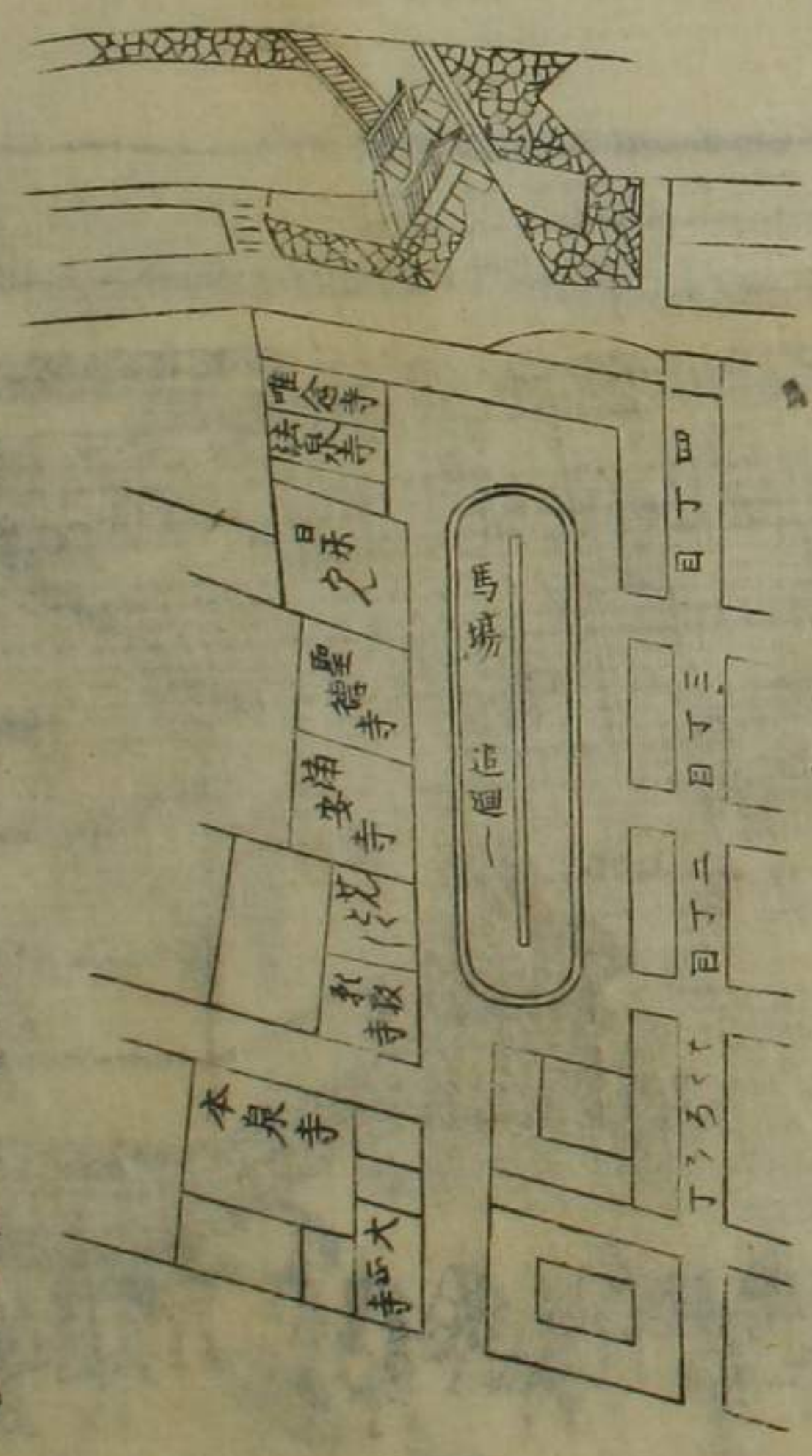
昔ハ神田川の隔もかく此川の南北とあり

馬場 馬喰町三丁目の西北の裏通あり 江戸馬場の中最も古

慶長五年関ヶ原 河陣の時馬揃あり一所なりと云傳ふ

馬場工頭高木源兵衛是を預りしむ

寛永十年此の草紙に馬喰町とあり 此地を馬喰町と云ふ此由緒あり



浅草橋 神田川の下流浅草河門の入口は架を此所ハ高札を建



よ
か
うり
れ
良基

馬喰町馬場

鶴岡放生會職人寺合
博勞恵

あへ
世の

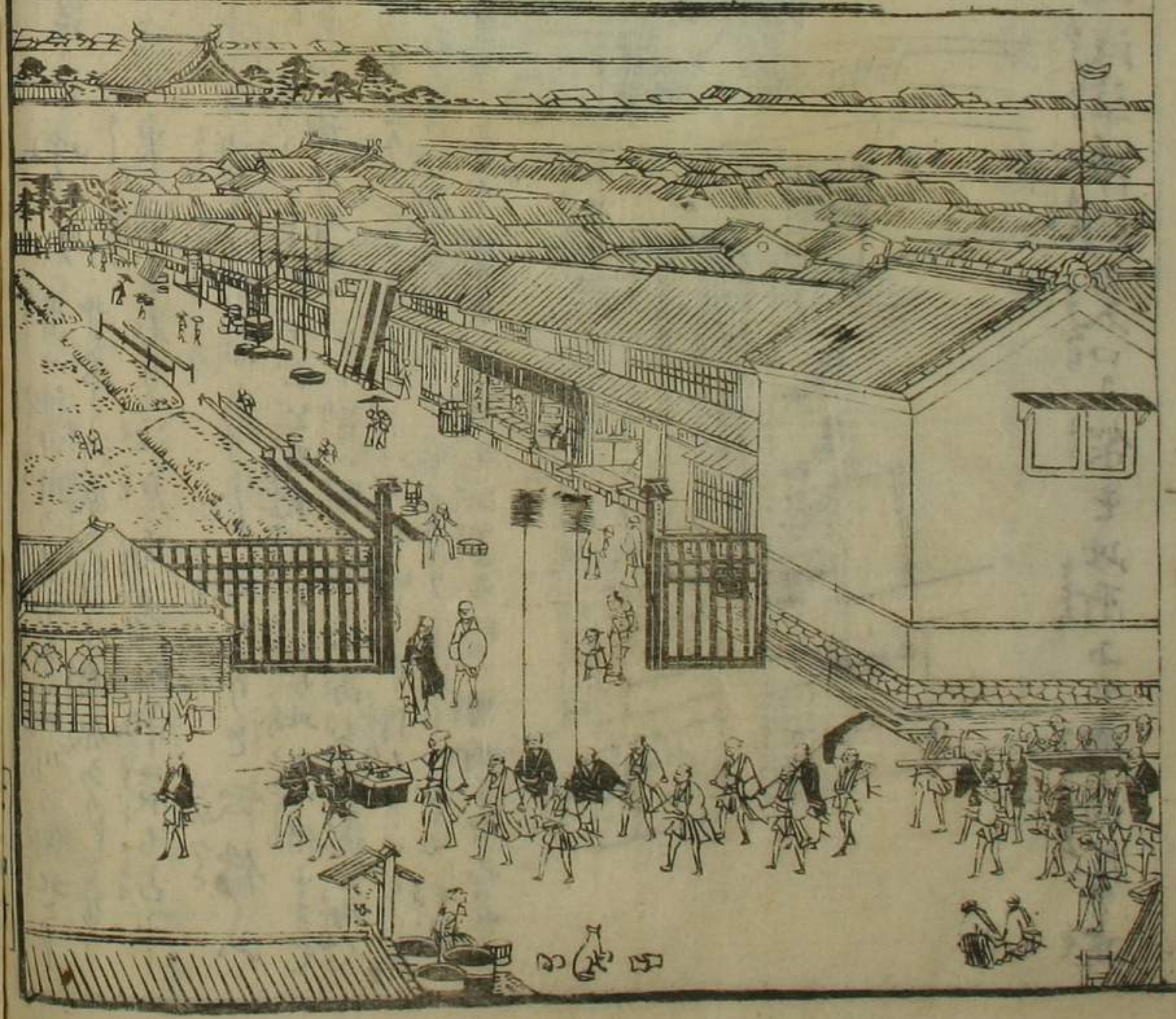
人ふもあれの

あぢぢぢ

つけすまひ

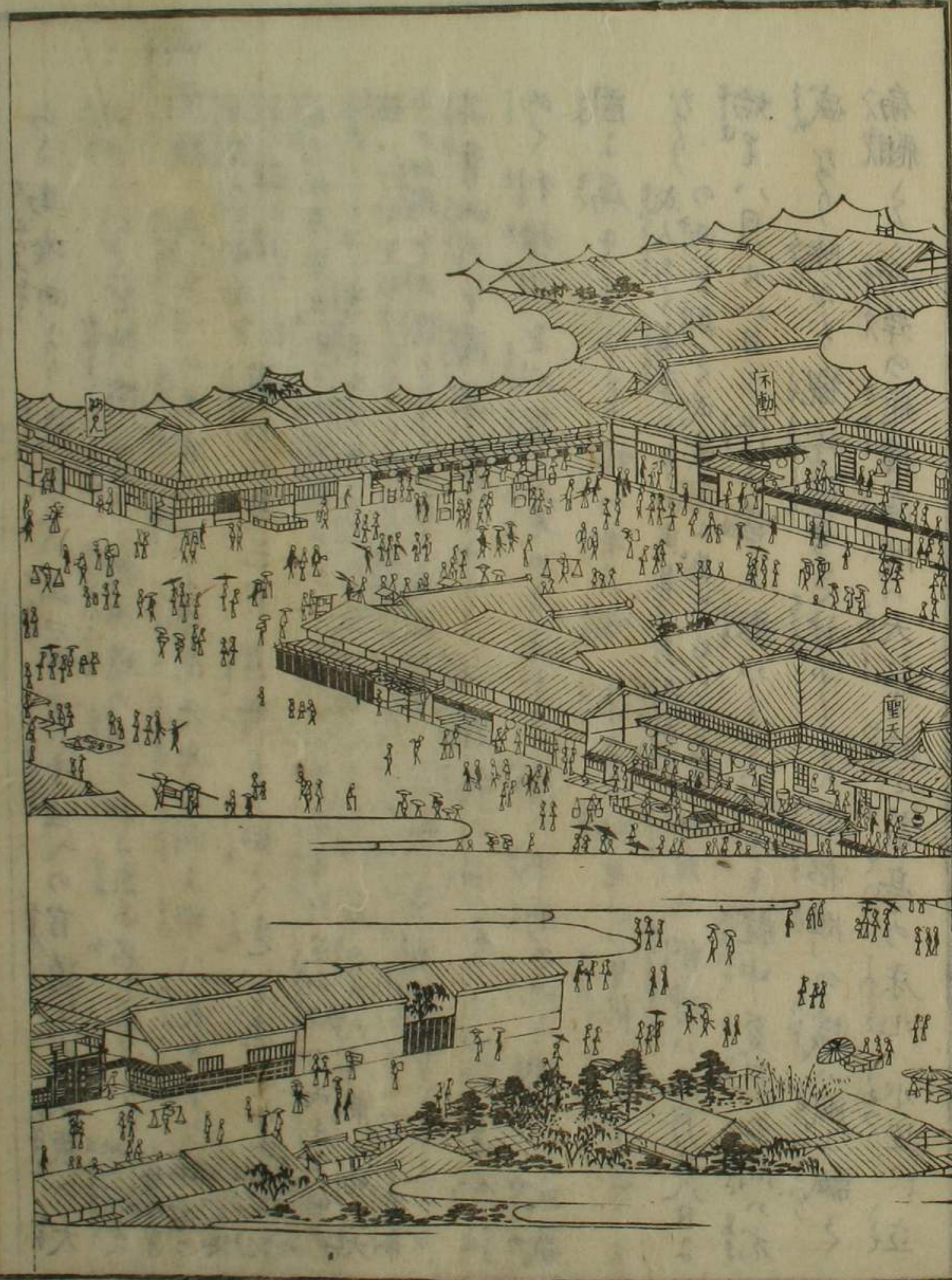
こと

門神門





錦繪
 江戸の名産中て
 他邦無比なる
 中極彩色珠
 更なる家の
 ひやありて法
 小賞美をこ
 黠



茶研堀
不動
金毘羅
歡喜

らる馬喰町より浅草への出口中々住への官道なり此東の大
川口よかを柳橋と号く柳原堤の末はあふ名とまるとそ
兩國橋 浅草川の末吉川町と本所元町の間架は長九十六間

寛文元年辛丑新に兩國橋を架し普請奉行芝山評内兩氏より命せ
られしと云く舊名を大橋と号し事跡合考は万治二年東の大川筋に始て大

橋一ヶ所をわけけりといふ事此橋の形ハ扇を閉きたるふかふかといふ事
其昔此川を國界とせしより兩國橋の号ありといふ事今此

めく利根川を以界と定めたり後ハ本所の地も同く武蔵
國は屬せしといふ事橋の号ハ唱へ来りし任せく其終改らる事と

なり或人云く貞享三年丙寅春三月利根川此地の納涼ハ五月廿八日
始り八月廿八日終る常は賑々といふ事就中夏月の間ハ尤

盛なり陸中を觀場とせき計あり其招牌の幟ハ風ハ飄々
扁翹より兩岸の飛樓高閣ハ大江に臨み茶亭の床ハ水辺に立

